

## 国際学部の学生たち

田巻 松雄

国際学部は、2016年度入試より、特別入試として「外国人生徒入試」を導入した。外国籍で、日本国内で高等学校や中等教育学校もしくは外国人学校を卒業した(又は卒業見込)者を対象にした特別入試であり、国立大学では初めての試みである。

また、国際学部は、2017年4月より、従来の国際社会と国際文化の2学科から国際学科1学科の体制に生まれ変わった。学部教育の目標として「多文化共生に関する体系的な学び」を掲げ、「多文化共生」を実現するために必要な知識、関心・意欲そして行動力を備える21世紀型グローバル人材(グローバル人材)の育成を新たな目標と位置付けた。グローバル化する地域の現状と課題を多文化共生の視点から読み解き、問題の構造をふまえて社会を構想していく力を養うとともに、コミュニケーション能力や行動力を備え、外国語運用能力もある、グローバルな実践力を持った人材の育成、とも言い換えることが出来る。

このような国際学部に入學して来る学生たちは実に多様である。地元栃木県はもとより北海道から沖縄まで、全国各地から入學してくる。その中には帰国生、社会人、外国籍の児童生徒として日本の小中高で学んだ人、他大学等からの編入学者が含まれる。交換留学生を含む様々な外国人留学生も多く在学している。外国人生徒入試の導入はより多様な学生の入學に道を開いた。特に、外国学校の学生たちに国立大学への道を開いた意義はとても大きいと言えるだろう。外国人生徒入試を通じた入学者は5年間で15名を超えたが、ダイバーシティへの適応力を醸成する学習環境の充実に対して大きく貢献してきている。

ここに登場するのは、元外国人児童生徒たちである。外国人生徒入試で入學してきた学生もいれば推薦入試、編入試験、さらには一般入試で入學してきた学生もいる。日本で生まれた学生も、学齢期に来日した学生も、学齢を超える年齢で来日した学生もいる。HANDSの多言語による高校進学ガイダンスに中学生の時に参加した学生もいれば、ガイダンスで高校進学を果たした先輩として体験談を語った体験を持つ学生もいる。HANDSに関わりたくて国際学部を目指した学生もいる。HANDS Jr.に参加し、外国人児童生徒支援にかかっている学生もいる。そして、これからHANDSに関わろうと考えている学生もいる。

多文化・多言語的な児童生徒として、様々な意味で「外国人であること」、「外国につながっている」ことに向き合ってきた学生たちである。「HANDS10年史」の構想を練っている時に、ふと、かれらの体験談を発信できないかと考えた。

授業やHANDSでかれらと接していると、どんな体験をしたのか、聞きたいことが山ほど出てくるのである。外国人であるかれらだけが特別な体験や苦勞をしていると考えているわけではもちろんない。しかし、外国人児童生徒教育問題に関わってきた者として、かれらの体験から大いに学びたいと思っている。今回体験談を書いてもらったのは、授業やHANDSで知りあった学生たちに限られている。その他の学生とは新たな出会いを楽しみにしたい。

### 国際学部卒業生・在籍生17人のレポート

#### 母国往来と自分で開拓した道

小波津 ホセ

##### 来日動機

私は1984年にペルー共和国の首都リマ市で生まれ、8歳だった1992年2月3日に初来日しました。先に出稼ぎ者として来日した親の呼寄せによって日本での生活が始まりました。親は、日本での出稼ぎ以前にはアメリカ合衆国で出稼ぎをしていました。その間、そして初来日を果たすまで兄と私は日系人家族である母方の家に預けられ、日系人学校に通学する生活を送っていました。日本に対する知識は、日系人学校、日系社会やテレビ等のマスメディアでの限定的な情報であり、日系人であるとはいえ十分ではありませんでした。

##### 日本語とスペイン語

ペルーで生まれ日系人家庭内で成長したとはいえ、親戚内に日本語に精通する人はいなく、日系人学校で勉強した日本語は平仮名の読み書き程度だったため日本語ができない状況で来日しました。逆に、スペイン語は母語であり、来日した当時は8歳程度のスペイン語能力がありました。日本語の本格的な習得は、日本の小学校への編入後からであり、原学級、国際教室そして家での自主学習が大きな役割を果たしました。また、当時の小学校や地域には他に外国人児童生徒がおらず、日本語漬けの毎日が小学校内外で強いられる状況で生活しました。国際教室への通級は最初の半年で、その後は限定的な時間へと減少しましたが、小学校卒業までは弱点(発音、文法等)に対する指導をその都度受けていました。中学校入学以降、日本語指導を受ける機会はなく、他の日本人生徒同様の扱いでした。

一方、スペイン語は8歳まで流暢に話し問題ありませんでした。来日後、スペイン語を話す相手は親と兄しかおら

ず、親は仕事、私は部活動という生活様式の異なる時間を家庭で過ごすことでスペイン語を使用する回数が徐々に減少しました。兄とは日本語習得後、周囲の視線もありスペイン語よりも日本語使用を好むようになり、家庭内であっても言語差異が生まれました。日本語使用率が増し、スペイン語は話す言語よりも聞く言語へと限定され、スペイン語能力の低下につながっていきました。実際、小学校3年生頃にはスペイン語能力が低下する自分を認識するほどでした。これ以降、ペルーへと長期帰国する21歳までスペイン語能力は低下していきました。今考えると、周囲にスペイン語を話す環境(支援、ペルー人不在)が欠如したことと日本語優先の環境が大きな要因だったと感じています。そのため、スペイン語能力の低下は親との会話不足につながっただけではなく、アイデンティティ喪失にも大きく影響したと思います。大人になって、当時のスペイン語とアイデンティティ喪失は外国人児童生徒として学校生活への適応という点では積極的な効果をもたらした半面、自分の将来的な可能性を狭めた現象だったとも考えています。その点、成人後のペルーへの帰国はスペイン語能力とアイデンティティにおいて自分に大きな変化をもたらし、その後の生活にも影響したと感じています。

##### 学校生活

学校生活において終始変化しなかったのは周囲からの視線でした。編入・入学当初、名前が呼称される度、また部活動の学外試合・遠征、友達と外出する度等には学校内外での視線を感じる事が常でした。近年になってこの現状は変化しつつありますが、1990年代、2000年代には周囲の視線を浴びながら生活していました。このように感じ取っていた背景には、自分は周囲と「同じ」であると考えていたにもかかわらず友人・知人でない周囲から「異質」な存在として把握されていたことに原因がありました。日本語をある程度認識した小学校高学年(学習面でも困難は減少)から自分はペルー人よりも日本人という認識の方が強く、アイデンティティを失い同化が進んでいました。そのため、学校生活において周囲との同じ行動は当然であり、そうでなければ仲間外れにされる可能性が高いと感じ取っていました。それは、部活動でも同様でした。部活動が日本社会、日本語、学校生活への順応に重要な位置づけを占めたことは間違いありませんが、日本的な集団行動を強化させたことも否めず、学校生活の中で欠かせない時間(集団行動や友人関係の強化)でした。ある程度学校生活に適応した結果、いじめや嫌がらせをされることはほとんどあり

ませんでした。今になって振り返ると、私は周囲に同化することでペルーから日本社会に持ち込んだ「自分らしさ」を喪失して、成長することになりました。

##### 周囲の支援

周囲の支援を強く感じたのは、小学校卒業するまででそれ以降は自助努力が大半を占めていたと思います。来日当初は、特に学校の先生のみならず周囲の友達からも学校生活における支援がありました。学校制度、教科指導や生活一般において学校内外で指導・支援を受けていました。ある程度の日本語習得後は、支援というよりも日本的な習慣・風習を熟知していない人に対する説明という形式に変化していきました。学校の先生は、私の知らないところで親への支援を継続していましたが、私が日本語を理解するようになってからは私を通して親へと伝達することが当然となり、私に対する負担が増えました。親が通常すべき手続きを日本語がわかる私が代わりにすることが当然となり、親の威厳・権限が低下していく要因となりました。

中学校以降は、自分自身で物事を判断することが親に説明するよりも早いという認識が芽生え、金銭が絡む重要なことでない限り自分で判断して学校に書類を提出することが増えていきました。私がある程度日本語を理解すると周囲の支援は極端に減少していき、周囲に迷惑をかけなくなりました。それは、自分への負担が増加することを意味して、親との関係を歪なものへと変化させていきました。歪とは、親は親ではあるが学校生活における主権は自分が握り、経済的な要件以外は親の必要性等がないことを意味していました。これは、親と距離をおくことを助長した経験であったとも今では感じています。もちろん、学校生活以外に親の職場における手続きや日常生活においても親から頼られる回数は徐々に増加していき、さらに負担になったことも否めず、親を「理解」するよりも「距離をとる」ことが当然の選択肢であるとも感じていました。

##### 高校進学

高校は、市内の県立高校に一般入試(5教科入試)で進学しました。将来的な夢や目標があったから進学したわけではなく、理由は3つありました。周囲の友達に合わせたこと、部活動を優先したこと、そして他に選択肢がなかったからです。小学校と中学校から部活動でサッカー部に所属していたため友達が多く、学力的にもかかれらと類似していたので、日本人であるかれらと同じ高校に進学することが1つの目標で、「仲間外れ」になることを回避したかったのです。また、居住していた地域には工業団地はなく、中

学校を卒業して容易に就職先が見つかることはありませんでした。学校の先生もこの状況を理解しており、「外国人だから」という先入観はなく力を入れて進学を勧めていました。当時、私立高校のスポーツ推薦もありましたが、県立高校と比較して偏差値は低く、中学校の先生は全く勧めなかったのが県立高校を選択して進学しました。高校は進学校で、部活動との両立は困難でしたが、友達との良好な関係性があったから卒業できた部分もあったと感じています。高校生活の3年間は日本の学校生活の中で重要な位置づけ(勤勉、厳格さ、友達関係等)になっています。

### 専門学校進学

専門学校への進学は、高校進学とは異なり友達の影響はありませんでした。理由は、高等教育への進学では多くの友達がサッカーを継続するという選択肢はなく、興味関心を目的とする決断、進学可能な教育機関や経済的な事象が関連するようになり、かれらと同じ選択肢を考えることが困難になりました。また、高校2年生の際に10日程度ペルーへと一時帰国したことも影響しました。帰国理由は祖母が亡くなり、葬式に出席するためでした。この間、勉強に遅れをとり各科目への対応が疎かになりました。学年では「中の下」程度だった成績はその後急激には伸びず、通塾もしなかったため自分の能力に見合った高等教育への進学が限定されるようになりました。

高等教育進学にあたって目標はありませんでした。進路相談等はありませんでしたが、明確な進路先や具体的な目標を見出すことができませんでした。その中で、ペルーに一時帰国したこと、担任にスペイン語を活かした選択を考慮すべきだと助言されたことで、将来的にスペイン語を活かした職業に就くことを考えるようになりました。ただし、その当時の私のスペイン語能力は皆無に等しく、本格的に活用できる語学力ではありませんでした。兄は、大学進学を果たしていましたが夏季休暇等は何もせずに家で生活していたことを反面教師に考えたことと親への負担軽減から、4年制大学よりも2年制の専門学校への進学を決断しました。専門学校へは推薦で合格し、スペイン語と英語の語学力を習得することが目的で進学しました。専門学校の生活では、類似したルーツを持ったペルー人に出会いましたがかれらと仲を深めるよりも日本人と時間を過ごすことの方が多く、アルバイト生活にも精を出し当初の目的を見失うようになりました。専門学校の2年間は思っていたよりも早く経過して、就職活動は具体的にはせず卒業後の進路は明確になっていませんでした。理由は、日本社会に居場所を見い出せず、外国人でありながらも「日本人化」した自

分の魅力を日本社会で活用する自信が全くありませんでした。日本人と競合しても国籍で劣る(外国籍)、企業側の先入観(ペルー人という外国人)や特別な能力の不足(例えばスペイン語能力)という相対的な状況から自信を持てずにいました。その結果、自分を取り戻す1つの手段としてペルーへの帰国を決断し、専門学校卒業と同時に帰国しました。

### 宇都宮大学3年次編入から博士後期課程まで

ペルーへの帰国は1年程度を予定していましたが、最終的には6年間の長期滞在となりました。その間、ペルーで就職(日本語教師、日本大使館現地職員)を経験したことも貴重でしたが、自分を見つめ直す大事な時間ともなりました。自分を見つめ直すとは、アイデンティティ(ペルー人、日系人)、ルーツの再発見、親戚等とのつながりの強化にもなりました。ペルーでの6年間はこのような意味でも重要でしたが、その後の人生に大きな変化を与えた転機をも経験することになりました。

この転機とは、リーマンショックを機に日本で生活していたペルー人の子どもが帰国してかれらを受入れ、支援したことでした。かれらと接していく中で日本社会に疑問を抱くようになり、日本社会や日本の外国人労働者とその子どもに興味関心を持つようになりました。ペルー滞在中に縁があって知り合った宇都宮大学関係者から話を聞いて、宇都宮大学への編入を意識するようになりました。本格的に編入を検討するようになったのは、再来日を果たした2011年3月からで、翌年4月からは宇大生として宇都宮市で生活を始めていました。改めて学生生活を送ることに抵抗はありましたが、大学という生活空間も後押しして、前向きに捉えるようになりました。また、自分を偽って日本人として生活していた専門学校時代までの期間と比較すると、ペルーでの生活経験も積極的な効果をもたらし、「ペルー人」でいられることに抵抗がなくなったことに居心地良さを感じていました。学業では、ペルーで出会った子どもの現状を意識しながらペルーを中心とした卒業論文をまとめました。当初、学部卒業を一つの区切りとして目標にしていたため、編入後の2年間で最後までやり切った達成感もあったと思います。

最終的には博士後期課程まで修了することになったのですが、その背景には2つのことが影響したと考えています。まず、研究の楽しさを少しずつ理解したこと。研究は容易ではなく、時間、費用と辛抱強さを試されることではあるのですが、何かに没頭できるという意味でも健全で、社会に貢献できる1つの方法であると感じるようになりま

した。そして、研究を通しての人とのつながりの重要性を感じたからです。研究は個人で進めることがほとんどですが、それは必ずしも孤独を意味するわけではありません。研究を通して知り合う人、指導をしてくださる人、協力して下さる人等と多方面においてつながりが増えて異なった視点で知識等を獲得できたからです。自分の努力も重要な項目ではあるとは思いますが、周囲からの支援等も重要である、と修了した今でも強く感じています。

### 将来

30代後半に突入して、将来の夢、目標は10代や20代のように語れないですが、外国人の子どもに「自分らしく生きる」ことを伝えることができると考えています。私が考える「自分らしく」とは、ルーツを大事にして生活することです。最終的な選択は本人がするものですが、外国にルーツがあることを日本で生活することで拒むのではなく、自分の一部として理解して、尊重して育むことが大事だと考えるからです。それはいずれ大人になった際には自分の可能性を広げることにもなると考えています。

### メッセージ

日本では「外国人」として生きづらいと感じることが多々あると思います。しかしそれは、必ずしも日本社会に非があるからではありません。自分が外国人であることを拒んだり、嫌ったりすることに原因があることもあります。また、親が悪いわけでもありません。親には親なりの理由があり、日本での生活を始めたことを知ることも大切です。そして、周囲の日本人と類似する生活ができないことも多々あることは事実ですが、何かを簡単に諦めることを意味するわけでもありません。自分の強みを理解して将来へと繋げてください。

### 自己責任という言葉に惑わされずに時には誰かのせいにもしよう!

王 希璇

### 生まれと日本での就学歴

日本に来る話は私が小学校高学年の時にすでに出ていたが、すべては私の中学受験の結果次第だった。今日本にいるわけなので、私の中学受験はうまくいかなかったことをお察しください。それでも私は日本に来ることに対して正直抵抗はなかった。というより、地元のある中学校にずっと通うことと日本に来ることを天秤にかけたときに、私のプライドは日本を選んだのかもしれない。そして2010年の8月19日、私は日本に来ることになった。

私の両親は私が小学校1年生の時に日本に出稼ぎにいった。私は母方の祖父母に預けられた。中国でいう留守児童(両親のどちらか、または両方が都市へ出稼ぎに行き、残された子どもが、両親のどちらか、または祖父母や親せき、あるいは友人に預けられた14歳以下の子ども)にあたる。そして中国で中学一年生を終えた後、私は日本に来て、横浜の公立中学校に編入した。私の中学校は外国につながる生徒が多かったのと国際教室があったので、比較的苦勞なく学校生活を送ることができた。また私は中国にいた頃から日本のアニメが好きだったので、日本語の勉強も苦ではなかった。

といっても、私の日本での生活は順風満帆ではなかった。学習の面は比較的大きな問題はなかったが、そのかわり私はずっと人間関係で苦勞していた。ずっと人見知りで内気な性格だったので、私は大学に入るまで学校では友達がほとんどいなかった。私にとって学校での時間より放課後の時間のほうがずっと楽しかった。それはボランティア教室で先生たちとしゃべったり、同じ中学の同級生(中国出身の子たち)と一緒に勉強したり、遊んだりする時間だった。もちろん学校の先生方にもたくさん支えていただいた。特に中学校の国際教室の先生は学習面だけでなく、生活面もたくさん面倒をみてくださっていた。今でも感謝している恩師である。

私が生活していた神奈川県では来日して3年以内の外国人生徒に向けての高校入試制度がある。私は最初からその制度が使える高校に的を絞っていた。自分の能力と照らし合わせて、先生方と相談しながら志望校を決めていた。私が通っていた高校では取り出し授業があった。そのため進学後も安心して勉強することができた。私は高校では部活動には入らず、そのかわりボランティア活動には積極的に参加した。大学進学は最初から意識していた。私の家庭は教育を大切にすることで、大学への進学は自分の中では当たりまえの事だった。しかしセンター試験は最初から無理だと悟って、AO試験の入試対策を頑張っていた。高校もそうだったので、大学も国際関係の学部に進学しようと考えていた。自分で関連する小論文の問題を探して、文章を書く練習をしていた。学校の先生やボランティアの先生に指導をお願いしていた。

### 大学進学と大学生活

宇都宮大学を知ったのは担任の先生からもらった資料がきっかけだった。資料をもらった時にはもう10月で、入試準備をするにはすこし遅い時期だった。それでも国立という授業料の安さと一人暮らしができることが当時の私に

とってはとても魅力的だった。11月のオープンキャンパスに行って、すぐに宇都宮大学を受験することを決めた。運よくたまたま入試に求められる資格を全部クリアしていたので、受験することができた。ボランティアの先生の助言で高1の夏に日本語能力試験一級を受けた。TOEICは高校の学科が積極的に動いていたので、定期的に受けていた。また高校の時からずっと続けていた子ども向けの日本語教室でのボランティア活動も自分のアピールポイントになっていた。これらの活動のおかげで、私はたくさんの人たちと関わりを持ち、自分の輪を広げていくことができた。宇都宮大学を受験しようと思ったきっかけも外国につながる子どもたちを支援するHANDSプロジェクトがあるからだ。

大学進学後に苦労したことは論文の読み解きとレポートだった。何が正しい論理的な書き言葉なのか、よくわからなかった。また高校の学習とは別の日本語力が求められるので、すぐには慣れなかった。

自分としては、大学の間外国につながる子どもたちの支援活動の幅がさらに広げられたことが一番の収穫だった。大学生だからこそできた自由時間で学習支援や団体活動に充てられた。また教育関係のことについてもたくさん受講できたことが自分の中ではとても大きかった。一番記憶に残ったのは大学4年生の時の教育実習だ。私は横浜にある母校で実習することになっていた。幸運なことに当時日本語を教えてくれた先生も、担任の先生もまだいた。7年前とは違う立場で、今回は「先生」として、かつての自分と同じ境遇の子たちと出会う。子どもたちからみた私はどのように見えるのだろうか。教育実習では多くの外国につながる子どもたちと接する機会があった。廊下ですれ違う時も中国にルーツを持つ子たちはみんな「老师好」(中国語で先生こんにちは)とあいさつしてくれていた。彼たちがかけてくれた些細な言葉でも、私の自信につながっていた。そして私は誰よりも子どもたちに寄り添いたいと思った。教育実習で出会った子たちや得られた経験は自分の大学4年間の宝物である。

#### 将来のこと、母語、伝えたいこと

私の夢は日本にきている外国につながる子どもたちがみんな自分の夢を持てることである。日本に来たから自分の可能性を諦めるのではなく、しっかり成長して、なりたい自分を構想できるくらいの余裕?を持てるようになってほしい。そのための支援をしていきたいと思う。私はこれから大学院に進学し、外国につながる子どもたちの進路問題、キャリア形成について研究していきたいと思う。また私は

何人かの同じ外国にルーツを持つ若者と一緒に「多文化ユースプロジェクト」という団体を立ち上げている。「多文化ユースプロジェクト」は多様な背景をもつ若者のネットワークを作り、外国につながる子どもたちの進路や学習支援を行っている。また、多文化共生を目指して、社会に対する発信も活動の一環として行っている。このプロジェクトは外国につながる若者たち(高校生、大学生、大学院生など)が主体となって、神奈川県を中心に活動している。日本で暮らしていく上で、やはり自分たちで自分たちの将来を考え、動いていくのが大切である。この活動をこれからも続けていきたいと思う。

私はちゃんと自分の母語と向き合っていないと思う。というのは、私は中学1年生の時に来日しているので、母語はある程度確立していた。大学に入ってから4年間は母語を使う機会が極めて少なく、最近では単語を忘れやすくなるような気がする。また親と交流するときは、日常会話は何ら問題がないのだが、大学関係や進路関係の難しい話はできない。そもそもその概念を中国語でどう表現すればいいのかわからないのと、同じ概念がそもそもないのが原因だろう。母語を忘れないためにも、親子関係の良好が一番の近道だと個人的に思う。

日本での生活は思う通りにいかないことの方が多いかもしれない。嫌ですべてを投げ出したいこともあるかもしれない。すべては自分がよくないと考えることもあるかもしれない。しかしそのようなことは決してないから、自己責任という言葉に惑わされずに、時には誰かのせいにして!そして苦しい時は逃げてもいいくらいの気持ちの余裕を持とう。進学は唯一の出口ではないし、全員にとって理想の道でもない。自分をよく知り、自分にとって一番の進路を選んでほしい。そしてなにより毎日楽しく生きてほしいと思う。

### 韓国から日本の高校留学を経て大学進学

金 信穆

#### 韓国で生まれ日本の高校へ留学

私は1997年9月9日に韓国で生まれました。私は中学校までは韓国で通い、高校から日本の高校に進学しました。私は韓国で小さい頃からサッカーをしており、高校でもサッカーを続けたいと考えていたのですが、当時(2011~2012年頃)のサッカー日本代表のプレーに感銘を受け、日本への留学を決意しました。私が進学した高校は、私立の高校で、入試は国語・英語・数学の3教科の試験と面接を受けました。

私の高校生活は、大きくサッカーをやめる前とやめた後

に分かれます。私は1年生の9月(2013年)サッカーをやめました。サッカーをしていた頃は、スポーツ寮で生活をしていました。朝は朝ごはんを食べて8時頃には寮を出て学校へ行き、授業が終わると学校から自転車で30分程度かかる人工芝のグラウンドに行き、4時から7時までに練習をして、その後8時には寮に戻り、お風呂に入り、夜ごはんを食べたら一日の日課が終わります。あとは、宿題などがあれば宿題をし、何もなければそのまま寝るような生活を送っていました。

サッカーをやめたあとは、まず一人暮らしを始めたことが大きな変化です。また、放課後の生活も大きく変わります。学校が終わると家に帰り、よくテレビを見ていました。私は、この時に全て理解できていなかったにも関わらず、とりあえず見続けたことが、日本語が上達できた要因の一つだと考えています。夜ごはんは、家の近くの食堂かスーパーかコンビニなどで済ませていました。夜ごはんを食べたあとは、寝るまでよくテレビを見たり、ゲームをしたり、アニメを見たりしていました。

私の高校は、留学生を担当する部署があり、その担当の先生によく日本語の指導や、大学入試時は、面接や小論文の指導をしていただきました。高校生活で一番支えられたのはこの先生だったと考えています。友達との関係は、休日に集まることはあまりありませんでしたが、昼休みにはよく集まってゲームをしたり、たまに放課後に家で遊んだりしていました。

#### 大学進学

私が日本の大学への進学を希望した時期は、日本に留学しようと決意した中学校3年生の頃です。日本に来る前から韓国の大学に進学することはあまり想定していなく、日本に留学すると決意した時点から大学も日本の大学に進学することを想定して日本の高校に進学しました。日本に留学して来た当初は、サッカーで大学に進学しようと考えていたのですが、サッカーをやめたあとは、正直大学で何を学びたいかはあまり考えませんでした。そこで高校3年生になり、大学進学について考える時期が来て、色々迷っていた時期に当時の担任の先生が、宇都宮大学国際学部で外国人学生入試という入試があると教えてくれました。そこで私は、宇都宮大学が国立大学だということもあり、受験をしました。

外国人学生入試では、小論文と面接の二つの試験で行われました。小論文は、正確には覚えていないのですが、多文化共生に関する問題だったと思います。当時は日本の国際化に対してほとんど無知だったのですが、それでも自分

で、問題について考えて意見を言えるような問題でした。面接では、志望動機、宇都宮大学国際学部で勉強したいこと、兵役はどうするつもりなのか、岡山で一番好きな場所などを聞かれました。

#### 私の日本語勉強法

日本語能力試験N1を取得した時期は高校2年生の夏です(2014年度1回目)。日本語の勉強を始めて約2年で取得することができました。日本語の勉強は、約6か月を韓国の日本語学校で、残りは日本の高校で行いました。私は、約1年6か月間の日本の高校での勉強がN1を取得に大きく影響したと考えています。私は、日本語能力試験を受ける時期になったら高校の留学生担当の先生たちによる日本語補習を受けていました。もちろんこの時に対策として日本語能力試験の過去問を解き、わからないことがあれば細かく指導していただいたことも大きかったと考えています。しかし、この補習以外にもう一つN1の取得に大きく作用した勉強法があります。当時はあまり意識して行っていたわけではないですが、あとから自分が常に日本語に触れる環境にいたことにあることです。私の場合、特に意識して理解しようとしなくてもある瞬間理解できるようになっていました。今考えると休み時間のみんなの話し声、家ではテレビなどで常に日本語に触れていたことが日本語能力試験の聴解問題で満点を取ることができた秘訣だと考えています。

私は実用英語技能検定準2級を取得して外国人学生入試の受験資格を得ました。受験したきっかけは、高校3年生の時に担任の先生に大学受験に役立つかもしれないと勧められたためです。外国人学生入試の受験資格を得るために受験したわけでもなく、特に対策もしていなく、純粋に当時の実力で受けたため、特にこれといった勉強法はありません。

#### 大学生生活

大学生生活で最も苦労したことは、授業が理解できなかったことです。これは、学習言語能力の不足によるものだと考えていて、私の場合は、1年生の後期くらいからは授業についていけるようになったのですが、前期は、授業内容のすべてを理解することができませんでした。これは、大学があらかじめ生徒の能力を把握し、チューターをつけるなどの対策が必要だと考えます。

私は、特に日本のグローバル化に興味を持ち、卒業論文でもこのようなテーマで書きました。その理由としては、自分も外国人の1人として共感できることが多く、自分のこと

のように思えて特に興味を持って取り組むことができたと考えています。

### これから

私は4月から日本で就職をします。しかし、一生同じ会社にいるつもりはなく、抽象的にはなってしまいますが、何か社会に新しいものを提案できるようなことを将来的にしてみたいと考えています。

日本の学校で学ぶと母語を忘れてしまうことは確かにあると思います。私は、高校から日本にきていますが、それでも時々母語で単語を忘れることがあります。これは、自分自身が努力するしかないと考えます。私の場合は、音楽、映画、友達や家族との連絡が、母語を忘れずに保たせていると考えます。

外国人生徒として日本で学んでいる人々へのメッセージです。外国で、外国の言語で学習をしているので、わからないことは当たり前です。わからないことを恥ずかしく思い、そのままにしておく一生わからないままになってしまいますので、わからないことがあれば恥ずかしくならず、その場で先生や友達に聞いてください。意外とみんな優しく教えてくれます。このような姿勢が学習においては大事なことだと考えています。日本で学ぶ外国人生徒のみなさん、これからも頑張ってください。

## 転機となったガイダンスでの体験談発表

アギーレ ナルミ

### 小中校時代

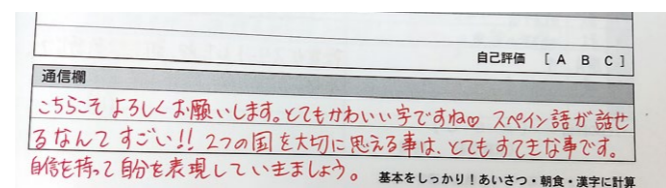
私は、日本で生まれた。日本で生まれ育ったことや、生後6ヵ月頃から通常の保育園に通っていたこと、そしてペルー人コミュニティから離れて生活していたことなど、家庭以外では常に日本語に浸っている状況だったため、日本語能力については特に大きな問題はなかったと思う。

日本生まれ日本育ちなので、日本語は問題ないと思われがちであるが、一点だけ周りの日本人の子どもたちとの間に差を感じるがあった。それは、国語である。具体的に言うと、四字熟語やことわざ、慣用句などの習得や語彙量である。これは、あくまで個人的な考えになるが、周りの日本人の子どもは、日本語のみの言語環境にあるため、学校での学習はもちろん、家庭では両親や祖父母との会話を通して自然と新しいことばに触れたり、あるいは授業で学んだものをアウトプットする機会がより多くある。当たり前であるが1つの言語の習熟度が自然と高くなる。これに対して私の場合は、家庭言語がスペイン語であったため、それ以外では日本語に浸った環境とは言え、他の人に比べ

て触れることのできることばが限られてしまっていたのではないかと思う。したがって、上記で挙げたような国語の学習に差が出ていたのではないのかなど考える。ちなみに、小学生時代の国語のテストは、表面が読解力をはかる問題で、裏面は漢字の問題というのがいつものテストのパターンだったが、表面の読解力はいつも60~70点で周囲と比べて点数が低かった。

学校生活においては、先生や友人を含め、人間関係には非常に恵まれ、全体的に充実した学校生活を送っていたと思う。放課後に遊ぶ同じクラスの友人もおり、公園で遊んだり、友人宅にお邪魔させてもらったり、一緒に駄菓子屋に行ったりなど、普通の小学生生活を過ごしていた。一点だけ、苦勞したことを挙げるなら、環境変化への対応である。新しい環境に入ることは、自分の中でとてもハードルが高いものであった。一目で「外国人」とわかる容姿は、どこにいても目立つ存在で、それをとても気にしていた。外国人のいない地域だったため、尚更目立っていたと思う。新しい環境になる度に、周りからどのように見られているのかを凄く気にしていた。

22年間生きてきた中で、1番の心の支えになった人は、中学2年生の時の担任の先生である。当時は、自分のルーツや容姿に悩んでいた。大きないじめを受けていた訳でもなく、ただ、自分の中でモヤモヤしていた。もともと内気で人目を気にし、自分の殻に閉じこもる性格が大いに影響していたと思う。そんなときに、担任の先生から「2つの国の文化を大切に想えることは素敵なことだよ」というメッセージをもらい、人との違いを肯定的に受け入れることが少しずつできるようになった。



### 高校進学

まず、高校進学をすることに関しては、自分にとっては「あたりまえ」のことだった。これは恐らく、周りが日本人のみである環境で育ってきたことや、姉が既に高校進学をしていたことなどが理由として考えられると思う。また、両親には(特に父親から)大学進学を勧められていたので、普通科の進学校への受験を決めた。入試の形態は、一般入試だった。高校入学当初は、大学進学に対する明確な目的はなく、「周りの子どもたちが大学に行くから私も行く」という感覚に近かった。

### 【学習面】

姉が大学進学をしていたこともあり、高校入学当初から大学進学を意識していた。また、姉が大学進学した際の入試形態が推薦であったことから、推薦も視野に入れ、成績上位者になることを目標としていた。そのため、中学時代以上に勉強には力を入れていた。定期テストの大体2、3週間前からテスト勉強を始め、放課後はもちろん、電車が来るまでの時間、電車の中でなど常に復習をするなどしていた。そのおかげもあって、高校3年間の全体順位は10位以内、悪くても20位以内に入り、クラス順位は常に3位以内に入っていた。

### 【学校生活】

中学時代に比べ、高校生活は積極的に色んなことに挑戦したと思う。特に、「国際理解弁論大会」に挑戦し、外国人児童生徒という存在を知らない人の前で自分の経験を話したことは、自分のルーツに改めて向き合うきっかけとなった。この国際理解弁論大会は、HANDSプロジェクト主催の「多言語による高校進学ガイダンス」で行った体験談発表よりも後のことなので、多言語進学ガイダンスでの体験談発表を経験していなかったら、国際理解弁論大会には出ようとも思わなかつたろうし、自分のルーツに向き合い、それを肯定的に捉えるきっかけもなかったと思う。だからこそ、田巻先生や船山千恵さんを始めとするHANDSプロジェクトの皆さんには非常に感謝している。HANDSプロジェクトは、私の高校生活に色んな気づきや希望を与えてくれたと思う。

また、高校3年間はアルバイトをしていた。職種は、結婚披露宴での接客サービスで、高校1年生から去年(2019年)の夏までの計6年間勤めた。アルバイトをしていた理由としては、両親から電車賃は自分で出ささいと言われていたためである。

### 大学進学

大学進学を意識するようになったのは高校1年生の後半である。しかし、その当時はあまり深く考えていなく、「周りの友達が大学に行くから私も行く」という軽い考えだった。

また、当時は外国語学部がある大学に興味を持っていた。宇都宮大学国際学部の受験を決めた1番の理由は、HANDSプロジェクトに関わりたかったからである。HANDSプロジェクトを知ったのは高校1年生のときで、体験談発表として参加した多言語進学ガイダンスがきっかけである。それまでは、外国人児童生徒というものは日本で私くらいしかいないと思い込んでいたため、他にも自分と

同じような生い立ちや経験を持つ子どもたちがいることをそこで初めて知り、衝撃を受けた覚えがある。

それから、自分の経験を活かして、自分と同様に悩んでいる子どもたちに何かできることは無いのだろうかと考えようになり、宇都宮大学の国際学部に入りたいと思うようになった。また、宇都宮大学は国立大学であるため、両親にも大きな負担をかけずに自宅から通うことができるということも受験を決めた理由の1つであった。

受験勉強に関しては、推薦入試とセンター試験の両方の受験勉強を同時に行っていた。推薦入試の勉強方法は、新聞を読んだり、テレビのニュースを見て、ノートに自分の意見をまとめることをしていた。高校の先生には、国際の分野に限らず様々な分野に目を通してよくと良いと言われていたので、なるべく心掛けるようにしていた。その一方で、センター入試に向けての勉強は、高校の3年次より国立文系クラスに入っていたので、センター試験対策は学校の方でしっかりしてくれていた。塾などには通わず、授業や放課後のセンター対策の授業を利用したり、あるいは自宅学習等でセンター試験に向けて勉強していた。

私は、推薦入試で受験したが、推薦入試で良かったと今でも思っている。このように考えるのは、自分の生い立ちや経験を話すことで人との違いをアピールすることができるのが推薦入試であったと思うからである。もちろん、一般入試で受験をすることもできたとは思いますが、正直に言えば、テストの結果や志望動機だけで合否の判断をしてほしくないという思いがあった。面接を通して自分がどのような人間なのか、どのような生い立ちや経験があったのか、そういう人間性の部分を見てほしい思いがあったし、それを活かすべき機会だと思っていた。また、今まで自分がコンプレックスに思ってきたことが、推薦入試の場であれば他の人と良い意味で差がつくと思った。

### 大学生生活

学習面では、入学当初は、授業の中の限られた時間で考えたことをまとめて文章にすることやレポートなど、苦手なかなと感じることは何度かあったが、回数を重ねることで慣れていったため、苦勞とまではいかなかった。

生活面では、実家暮らしのため、特に苦勞したことはない。高校生の時は、都内の大学に進学したいという思いがあったが、一人暮らしをしている友人を見ると、経済的なことも含めて実家から通える大学を選んで良かったと思った。もし、都内の大学に通っていたら、生活費を稼ぐのに精いっぱい、学業に集中することができなかったと思う。

大学での学びで特に楽しめている、あるいは楽しめたこ

とは2つある。1つは、日本人学生も含めた様々なルーツや経験を持つ多くの学生や、自分と同じような生い立ちや文化的な背景を持つ学生との出会いである。特に、元外国人児童生徒の学生たちとの出会いは、接していく中で新しい学びがあったり、それが刺激になったりした。また、同じ元外国人児童生徒だからこそ理解し合えることもあり、私にとっては心強い仲間であると思う。2つ目は、外国人児童生徒について多角的に学ぶことができたことである。教育的な視点を始め、社会的な視点や言語習得の視点、心理学的な視点など、様々な視点から外国人児童生徒について学べる授業が多かったと思う。

将来の希望については、漠然としているが、日本とペルーの架け橋になるような仕事をしたい。また、就職しても外国人児童生徒との関わりは無くさず、研究や学習支援など様々な形で子どもたちの支援に携わりたいと考えている。そして、早く自立して、両親を母国に帰らせてあげたい。

#### 最後に—自分の母語とメッセージ

まず、自分の母語は「日本語」だと思っている。このように考えるのは、日本語が最も理解できて、使いやすく、そして使用頻度が高いからである。これに対してスペイン語は、「継承語」に値すると思う。ここでは、自分のスペイン語能力について述べていきたい。

私のスペイン語能力は、日本語に比べたら低いものだと感じている。スペイン語を使う機会は、家庭に限られ、さらには使用する語彙も限られてしまうため、語彙量は全く増えないからである。自分から積極的に勉強したり、使用する機会を作るなどしないと、どんどんスペイン語が抜けてしまう。私の場合は、両親の日本語能力が不十分であったために、通訳をする機会が多く、必然的にスペイン語を使用する環境がつけられていた。このおかげもあって、両親と全くコミュニケーションが取れないという事態を避けることはできたが、それでも、自分のスペイン語能力は決して高くないと思うし、もっと勉強が必要だと思っている。

幼い頃は、ただただ外国人であることをコンプレックスに思っていたが、外国人として日本に生まれ、生活してきたからこそ貴重な経験ができたし、今の自分があると思う。HANDSプロジェクトに出会えたこと、素敵な言葉をくれた担任の先生に出会えたこと、同じ元外国人児童生徒の学生に出会えたこと、外国人児童生徒としての経験を通して様々な学びや気づきを得られたことなど、全ては私が外国人であったことがきっかけでスタートしていると考え、[外国人]として生まれてよかったなと思う。これからめ

げずに、勉強や仕事など頑張りたいと思います!

「みんなちがって。みんないい」(私と小鳥と鈴と—金子みすゞ)

お互いに頑張りましょう!

### 日本人、外国人、半分外国人

鈴木 アリサ

#### アメリカ、韓国、岩手

私は、日本人と韓国人のハーフで、つまり半分外国人です。アメリカで生まれ、4歳の時に父の国韓国へ渡り、15歳の春から母の国日本で暮らしています。アメリカにいた記憶は残念ながら幼すぎたために覚えていません。現在21歳ですが、今までの人生の2/3以上を外国で過ごしました。母国はどこと言えるのか、母語を何とするのかなど、ハーフなりの悩みの数々を経て、アイデンティティの形成に少々時間がかかりましたが、結論からすると、自分の都合に合わせて日本人になったり、外国人になったり、あるいはハーフになったりしています。

家庭内の言語は、2言語です。母と話すときは日本語、父と話すときは韓国語です。ここまでは、いたってシンプルなのですが、韓国で暮らしていた時、環境面の言語は韓国語、教育面の言語は日本語、という複雑な状況下にいたため、どちらの言語が得意かと聞かれると困る部分が出てきます。学校の勉強は日本語で、ピアノや水泳の習い事は韓国語だったため、「ケースバイケース」で、使える日本語(または韓国語)と使わなかった日本語があります。

教育面の言語が日本語であったことに関して説明すると、幼稚園から中学まで、韓国の日本人学校に通っていました。日本人学校という名の通り、日本の教育システムに沿って日本語で授業を受けます。日本の学校と違うところは、韓国語の授業がある点と、韓国について学ぶ時間があること、韓国現地の学校と交流する機会があるところですね。親の仕事の都合で日本からきて、2、3年通う子どもや私のようにハーフの人など様々なため、児童生徒の入れ替わりが激しく、毎年歓迎会と送別会があります。

日本語で教育を受けたのだから日本語が出来て当然と思われるかもしれませんが、日本の環境で日本の教育を受けることと、外国で日本の教育を受けることは果たして同じくらいの日本語力がつくのかというと、それは違うと思います。今でこそ、だいぶ日本慣れしてきたものの、まだ会話(の中の日本語)についていけない場面や、テレビの日本語が理解できていないなど、不自由を感じる場面があるからです。それは私だけでなく、

私と似た生い立ちの友だちもそのように感じていると思います。

#### 田舎コミュニティにおけるよそ者

日本に来る前は、どの部分に憧れていたかは忘れましたが、とりあえず未知の国への憧れはあり、来た後に現実をみると、韓国とたいして変わらないと知りました。高校は岩手のそれまで見たこともないような田舎にありましたが、田舎コミュニティによそ者が馴染むには勇気と努力が必要でした。幼い頃からずっと一緒に彼らにとって、私はよそ者であるだけでなく、金髪でも彫りの深い顔でもなく、韓国から来た日本名の、日本語と韓国語を喋るアジア人、という複雑な人でした。また、彼らの言語は、標準語ではなく、岩手弁。毎日強制的に岩手弁の聞き取りテストと日本で育った日本人とともに授業を受けました。また、岩手弁はともかく、教科書に記載されている日本語の理解に苦しむことが多々ありました。

普段の日常会話では使わなくても分かっている当然の言葉が、私には「当然」ではなく、家族や先生に聞くなどして苦し紛れに補っていました。「そんなこともわからないのか」という目、空気は、外国人児童生徒の大部分が、どこかのタイミングで一度は、もしくはたくさん経験することだと思っています。私の場合は、幸いなことに、理解をしてくださる担任の先生がいらっしゃったため、日本語が分からなかったら楽に聞ける環境がありました。今振り返ってみると、担任の先生や家族に支えてもらったから勉強を続けられたのであり、私1人の力で進学できたわけではないと思います。全て運だ、ということではありません。教科書の理解できない日本語は、先生や親に聞き、自分でもう一度絵や図などを使って単語をイメージ化して覚ええました。会話などの日本語は分かるけど、教科書の日本語は難しい、というレベルだった私には、わかりやすく説明してもらってからイメージして理解する方法が最適でした。

#### 宇都宮大学へ

高校3年生になり、進路に悩んでいた矢先に、先生から、宇都宮大学国際学部の推薦入試の枠を勧められました。自分の背景を活かせると感じ、受験することを決めました。日本の地理は都道府県以外ほぼ分からなかった私は、宇都宮がどこか、という部分からはじめなければなりませんが、「餃子」以外の情報は得られなかったため諦め、受験対策を進めました。推薦入試は集団面接です。喋ることが得意でも読むことが不得意では勝負に挑めないため、新聞を読み、何人かの先生に練習台となってもらい、ディス

カッション形式で練習を重ねました。受験の前日に初めて宇都宮に行き、そこまで都会ではなかったことを知り残念だったことを覚えています。本番は練習の成果を十分に発揮したと感じました。テスト、というよりは、全国各地の同級生と意見を述べ合い、それを先生方が見ている、という感じで、あまり緊張をするような場面はありませんでした。

宇都宮大学に合格し、夢に描いていた大学生活が始まりました。大学の授業で日本語に困ったことは少なくなりましたが、例えばアルバイトで日本語が分からず苦労したことがありました。かつて「レンゲ」が分からないラーメン屋の店員でしたが、今まで生きてきた日常生活では知らなくても特に問題はなかった単語だったため、アルバイトなどを通して学んだ、と良い方向に考えるようにしています。大学での学びで特に楽しめていることは、先生方の見解を参考に自分の意見を持つことです。知らなかった世界を知り、自分の視点からもう一度その世界を捉え直すことが楽しいです。正解がない問題に向き合い、考え、行動することは、難しくしかしとても大切なことだと気づかされます。

#### 児童と生徒が頼れるのは大人

少し変わった生い立ちで、複雑な言語背景を持つ私は、完全な日本人でもなければ完全な外国人でもありません。なので、他の多くの体験談の苦勞と努力に共感できる部分もあれば、体験したことのない部分もたくさんあると思います。人一倍努力をしなければならないけれど、その努力は何かしらの形で良い結果をもたらしてくれます。しかしそのためには、周りの大人や友だちの理解や助けは必要です。みんなが同じ条件を持つことは理想ですが、それは難しいことです。宇都宮大学では、1人でも多く助けようと、ボランティア活動や研究などが行われています。外国人児童生徒を受け持つ先生方には、とっさに手を差し伸べられる存在となってほしいと願います。上から目線に聞こえてしまうかもしれませんが、児童と生徒が頼れるのは、大人です。そして、私や、元外国人児童生徒だった方々は、気持ちわかる分、彼らに何が必要かを見極めることができると思います。私たちの体験が、外国人児童生徒の方々の勉強や生活の参考になればと願います。

#### 自信と可能性

最後に、日本語が話せる外国人の話をします。私は、ボランティアを通して日本語の会話ができる外国人生徒の方々と出会いました。ある方は、数年前に来日して、日常会話は少しできる、と話していたのですが、素晴らしいこと

だと思います。私は、家庭内ですでに2言語出現していたため例外ですが、彼らは、家庭内と学校でしっかり使い分けているのです。もちろん、そうせざるを得ない環境ですが、もっと評価されるべき人材たちだ、と個人的には思います。また、なかには、日本語を話すこと=すごい、という自覚がない方もいたので、自覚してほしいです。同じ歳で2言語を場面によって駆使できる人は少ないです。私は、時に、韓国語を喋る日本人になったり、日本語を喋る韓国人になったりします。そのほうがなんとなくすごさだからです。理由がなんであれ、自信を持つことは、勉強をするときも含め、様々な場面で役に立ちます。これは、外国人であろうと、半分外国人であろうと、日本人であろうと同じく大切なことですが、慣れない地で、その国の言語を習得している、またはこれから学ぶ外国人児童生徒の方々には、特に大切なことだと考えます。私はこれから、自分のルーツを生かした研究や仕事に関わりたと思っています。外国人児童生徒の方々には自分自身の可能性を信じて広げてほしいです。

## 大学で学ぶ意味

谷口 ジェニフェ

### 生まれと日本での就学歴

1997年4月2日、ブラジル生まれ。1歳から3歳までは父方の叔母さんの家に預けられました。3歳から4歳の間に来日。静岡県に移住。保育園に入る前に親の知り合いに1ヶ月ほど預けられました。その後静岡県内の2つの保育園、小学校、中学校へ通いました。

日本へ来た時は日本語を全く話せず、保育園で少しずつ会話を覚えていきました。周りの園児が助けてくれた覚えがあります。小学校で文字を学んだので読み書きは小学校からみんなと一緒に学びました。

小学校では予定帳などを見ても意味がわからなかったため、近所のブラジル人が助けてくれましたが、忘れ物が多かった気がします。勉強で苦労した覚えがないのは、家で成績について何も言われなかったからだだと思います。とりあえずわからないことは答えを写していました。高学年になってから少しずつ成績や点数などについて認識するようになり、ちゃんと理解するために辞書を使ったり、読書をたくさんしていました。本を読むことや辞書を引くのが楽しかったからというものもあるかもしれませんが。小学校と中学校のメンバーが一緒だったため特に環境が変わらず苦労は少なかったと思いますが、学年で一人だけの外国人だったため珍しいように他の学年の人からは見られていました。同学年の人たちとは比較的親しかったと思います。

中学校に入ってから部活が始まり、成績が悪すぎるといけないため程よく勉強をしていました。部活の顧問が元外交官だったらしく、話を聞いているうちに外交官になりたいと思い始め、高校、大学進学を意識するようになった。英語と社会の科目が比較的得意だったことと内申点があったため、担任の先生に静岡県立高校の国際科を勧められました。進学に向けて苦手な数学と理科の科目の点数をあげるため短期間だけ塾に通いました。

悩んだことは想像以上に高校からお金がかかり始めることでした。親にもいつもお金がないと言われていたので、私立高校にはいけないなと少し思っていました。また塾もすぐお金がかかったので半年しか通いませんでしたが、プレッシャーがすごかったことは覚えています。しかし父が寛容的で大学まではいいとほしかったといわれていたので、とても感謝しています。

### 高校入学

高校入試は一般選抜でした。幸いなことに内申点が高かったため受かったのではないかと思います。また国際科だったため英語の点数も重要な要素だったのではないかと思います。平均的にみて、英語、国語、社会の3教科が点数を取れていました。

高校生活は一番楽しかった時期でした。同じクラスに外国籍の子が5人(ブラジル、ペルー、フィリピン)と境遇も似ていたり、考えも似ていたのととても楽しかったです。部活動も英語部でみんな一緒だったので毎日楽しかったです。また国際科では女子の比率が4分の3であったためほぼ女子高のような感じで居心地がとても良かったです。学校の授業も大変ではありましたが、同じ境遇の子たちと支えあえる環境があったため頑張れたと思います。また国際科のクラスだと様々な文化を学べる機会が多い授業だったので自分にあってて教養が深まり自分の将来について広い範囲で考えられた期間でした。またクラスの外国にルーツを持つ生徒たちに積極的にボランティア活動をさせることが多く、私も何回か地元のブラジル人学校でボランティア活動を行いました。

### 大学進学

中学の頃から外交官になりたい気持ちがあったため大学進学を考えていました。海外大学に行くにはお金がかかるということで日本国内だったら奨学金なども借りられるため、日本の大学に決めていました。また親も日本に住むと決めていたので日本国内だったら都合がいいと思い決めていました。しかし私立の大学は金銭的に大変になると

思っていたため国立大学の受験に落ちたら進学はせずに仕事をしようと思っていました。なぜそのように思うかのきっかけになったのが、高校の授業料を支払うのにもお金が足りず高校には隠れてアルバイトをしていた時期があるからです。高校の授業料も払えないのに私立大学の授業料が払えるわけがないのです。そのため、奨学金をもらいながら通える国立大学に入らなきゃという気持ちが強かったです。

宇都宮大学国際学部を決めたのは、先生に勧められたということとHANDS Jr.があることを知ったからです。また国際科ではないけれどOGのペルールーツの先輩が進学していたからです。成績的に静岡の大学へ行くより国立の他大学の方がいいと先生に言われたことも大きかったです。受験方法も私にぴったりのということで決めました。受験勉強にはたくさん新書を読むように勧められました。読書が好きだったため学校の図書館で毎週3冊ほど興味のある新書を借りて読んでいました。他には先生が新聞の社説や小論文を読み意見を先生に伝えるという訓練をしていました。またディベート練習を他の子たちと何回か行いました。

試験を振り返ると、当日の前に行った対策問題と類似の問題が出たため運が良かったということもあるなと思いました。さらに戦争関連に興味があったため内容理解があったということも関係していると思います。受かる確信はなかったのですが受からなかったら大学進学を諦めて働こうと思っていたため、すごくドキドキしていました。

### 大学生活

大学生活はとても楽しく、1、2年生の頃は新しいことばかりで過ぎるのがとても早かったです。アルバイトなども空き時間にしたり、サークル活動、ボランティア活動をしたりと充実していました。課題も難しく大変でしたが周りの友達と力を合わせて行っていたため終わった頃には達成感がありました。また宇都宮大学の学生は視野が広くて固定観念が少なく一緒にいると考えが広がるので可能性は無限大ではないかと錯覚するくらいでした。しかし実家で色々とおこり休学したため戻ってきからの学校生活はとても大変でした。友達も留学に行っていてほとんどいなかった一人で生活するのは少し苦痛でしたが、後輩ともしっかり仲良くする機会ができたのでいい時期でした。またサークル活動は休学を機にやめていたのですが、その分時間があまり他の活動に回すことができました。アルバイトやボランティア活動を多くできたため充実していたと思います。

大学の学びでは全てが繋がっているということに気づけました。一時期履修していた授業が全てリンクして学ぶことがとても楽しかったです。国際学部での学びでは普段気づくことができなかったことを発見できるようになったり、日々の生活をよりいいものにすると思います。仕事に就くための大学ではなくよりよく生きるための学びが多くあるのが大学なんだと思えるようになりました。以前までは就きたい仕事に就くための一つの通過点だと思っていましたが、その考えを考え直すきっかけになったのが大学での学びだったため、とても有意義な時間を過ごせたと思います。様々な人々と関わることにより、自分の視野も広がり考え方も多く変わりました。また自分のルーツや今の現状についての問題意識を持てるようになったことも大学での学びで得られた知見だと思います。大学進学していなかったら、工場で働きその現状に満足していたのかもしれませんが。その状況がおかしい、もしくは解決されるべきだとも考えずにいたかもしれません。私は現在はその状況にいなくとも、考えることをやめたらいつでもその状況に追い込まれる可能性があります。また現在も疑問を持たずにまたはその選択肢しかないと思い進学を諦め、その状況にいる人が多くいます。大学の学びで得られたものがその問題を少しでも解決できるヒントに繋がっていると思います。

### 将来の希望、母語、振り返り、メッセージ

将来の希望は私が悩んでいたことで悩まなくなる外国にルーツを持つ子供たちが増えることです。自分のルーツや家庭環境にかかわらず、日本語と母国語等を学べばキャリア選択が広がっていくそんな社会になればと思います。母語については小さい頃からずっと家庭で話していること、また読みかたを少しだけでも教えてもらえたことが大きいと思います。そのために母国語や母国の文化に対して抵抗がなく育ったことに繋がりました。母国語が理解できるだけでも母国の文化に触れられる機会も増え、理解度も上がります。さらに他の文化にも触れやすくなるようになると思います。

今の現状で大変だったり辛いことが多くあるかもしれないですが、選択肢は広がっている状況にあるということと自分のことを大切に、自分のやりたいことは諦めないでください。困っている時は身近な人に助けを求めたり、情報を集めることをやめなければ、絶対に助けてくれる人や情報は見つかります。自分で自分を助ける方法は限りないです。現状に満足せずにまた周りの言葉(親)であろうと自分の夢に関しては決めさせてはいけないと思います。自分

の将来だからこそ自分で決めて、自分で選択することが大切だと思います。もちろんアドバイスを聞くことは大切ですが、自分の選択に責任を取れるのは自分だけなので諦めないでください。

休学している時期にいろんなところで働いたのですが、そこで様々な親御さんに出会いました。ある親御さんは自分の娘(中学生)が私と同じように一生懸命働いて欲しい、私のように親と工場で働いてくれればいいのにと褒めてくれました。しかしその言葉を聞いた時私は泣きそうになりました。私は休学して働いていただけであって一生そこで働くわけではありません。やりたいことや夢もあります。そのため自分の娘に夢も聞かず(聞けず)、高校進学もできない娘さんにそのように言っていた言葉がとても悲しかったです。でも現状はそうなのです。親に頼れる子供だけがいるわけではないのです。

日本人だったとしても家庭環境から進学が厳しい子供はいます。しかし外国人にもなると、サポート体制の状況が二倍の苦しさを与えます。なので自分で選択できるよう自立をすることが重要ですが、中学生の子供たちには難しいです。少しずつアルバイトでお金をためて高校にその後進学するという考えができたとしても、適年齢をすぎた生徒を受け入れられる高校は限られています。いろんな壁がその子達に押し寄せるのです。親の経済状況や考えによって自分の将来が決まってしまうのはとても残念です。そのため、子供の自立を支えるとともに親が子の自立を支えられるようにしないといけないという課題にこれから向き合っていきたいと思います。全ての国の外国人がその問題を抱えているのかはわかりませんが、ブラジル人の親ではその比率が高いのではないかと思います。貯金に対する考えや子供の教育に対する考え方を変えていかないといけないと思います。現状を変えられるかはわかりませんが、やれることに向かってこれから考え、学びながら生活していきたいです。

## 大半の人は海外で学ぶ機会はない

熊谷 美陽

### 生まれと小中校

私は、1997年4月24日、中国の大連で生まれた。2013年2月大連空港から出発、成田空港に到着した後、すぐに岩手にある家へ移動した。人生初の一人旅、荷物が重くて辛かったことは覚えている。生まれてから一回も自分一人で市から出ることがなく、初めて一人で、生まれ育った町から日本へ渡った。「大連空港」から「東京成田空港」間の一人の時間はまさに「旅」と言えるものだった。

日本に来ることを決心したのは「東日本大震災」だった。それをきっかけにして、母から「日本にこないのか」という提案が上がった。でも私が決心した理由は日本の医療技術が進んでいるからだ。私は生まれてから目が悪くて、生まれつきで目の中の何かが変形していて、ひどい近眼で、日本の技術が進んでいるから、目を治療したいと思い日本へ来ることを決めた。来た当時の心境はもう覚えていない。

日本へ到着した一週間後、村にある村立中学校へ転入。中国では中学校3年生(前期)だったが、中学校の校長先生と担任が「日本語の勉強として学年下げたほうがいいのかも」と言ってくれて、2学年下の中学1年生に編入した。2月だったので、すぐに中学校2年生に上がった。

入学する前は校長室で簡単なテストがあり、「何が好きですか」、「これはなんて読むのですか」、「嫌いなものはなんですか」等と聞かれた。

私は元々、大のアニメファンだったので、毎日中国語字幕付きの日本アニメを見ていた。そのため、日本へ渡る時に日常会話の聞き取りに特に大きな問題はなかった。ただ、話すことは出来なかった。国語授業での読み直しなどは、とても苦痛だった。読み書きもダメだった。作文などは誤字がたくさんあり、先生がすごく丁寧に直してくれた。2年生になり日本の小説にはまり、本をたくさん読む。読書のおかげで読み書きをクリアすることができた。

中学生だったので、いわゆる反抗的な同級生が多かった。「よそ者は到底馴染めない」と感じた。嫌がらせや陰口は日常茶飯事だった。朝目が覚めて「どうして、まだ生きてるんだろう」と思うこともあった。今思うと不登校などに逃げなくて良かったと思う。

### 支えてくれた人

辛い生活の中に、支えてくれた先生がたくさんいた。最初、校長先生は書道を使って日本語のことわざを教えてくれた。意味は理解できなかったがひらがなの練習と思い書いていた。2年生に入り、国語の先生が昼休みを利用して、一緒に音読の練習と古典の基礎を教えてくれた。3年の時も昼休みは古典の練習問題の解説をしてくれた。

勉強面だけではなく、精神的な面で支えてくれた先生が二人いた。私の学校生活を辛いと知ってる先生がいた。建前のような言葉ではなく「こいつら(クラスでいじめをした奴ら)はまだ子供のままでバカだ、大して出世したりしない、この三年間を乗り越えれば、..の勝ちだ」のような言葉を言われた。具体的なことはもう覚えていないが「辛い、つらい、つらい、と我慢し続ければ、きっと爆発する、適度に調

整して、もう少しの辛抱だ」と言ってくれたことは覚えている。自分の辛さを理解してくれる大人がいたことは、その当時の私にとってとても大きな意味を持っていた。今でもとても感謝している。

最も印象的だった思い出は、学校の菜園で育てられた芋をみんなで焼いて食べたことである。悔いのない二年間だった。

### 高校・大学進学

高校進学を決める時、通学時間、学費、進学率などを考慮して、近くの県立高校を選んだ。一般入試と推薦入試の二択だったので、私は一般入試を選んだ。私が受けた高校は一般入試と推薦入試しかなかったので、中学校の先生が私に「推薦入試は、スポーツができる人が受けるのだよ」と説明してくれたから、私は一般入試にした。その当時は外国人に対する特別な入試があるというような話は、全く知らなかった。

入学後、科学部に入り、クラスの中で友達もたくさんできた。一番楽しい時間はお昼の時間だった。みんなと一緒に喋りながらお昼を楽しんでいた。一番の思い出は、高校三年生の夏で、暑苦しい中にもかかわらず、みんなが一生懸命自習している姿が印象的だった。

大学進学は常に意識していた。高校二年生の文理選択では文系を選んだ。商社や二国間の架け橋になりたいという夢を追いかけて、国際系や商学部をメインとして勉強を進めていた。私には商学部と国際学部両方とも捨てがたかった。大学受験の時は「推薦入試という枠でどこかの大学をとりあえず受験してみよう」と担任の先生に勧められて、「国際的な仕事につきたい」という夢を実現できるのではないかと思い国際関係の大学を探していた。担任の先生が宇都宮大学を提案して、受験することを決めた。落ちたら、まだ一般入試を使って2つとも挑戦しようと思った。受験勉強ではみんなと同じように過去問を解きまくる。国際学部の特徴に合わせて、多くの時事新聞や新書を読んだ。目的は自分の視野を広げ、知識を蓄え、思考回路を柔軟にすることだった。

推薦入試については、短い時間で内容を理解し、自分の意見を述べるだけではなかった。まず自分はどう考えるのか、次に他人の意見を聞き、自分はそれをどう思うか、何を上乗せできるかなど、頭の中は常に回転していた。推薦入試は本気で取り組みればできるものと思った。

### 大学生活

大学生活は一人暮らしの私にとって、一言で言えば「自

由]だ。一人の時間を十分楽しむ。私はサークルには入っていない。その分の時間をバイトに回した。学習においては、どうしても好き嫌いが出てしまう。嫌いな分野を乗り越えるのは一番辛い。自由記述式の問題について、「先生たちはどのような答えを求めているか」を当てるという戦法をとっている学生がいる。先生たちが何を欲しがっているのかを分析して回答する学生で、いわゆる、先生の好みを当てて、先生が好きそうな答えを作る、ということだ。わたしはそれができない。もうひたすらに自分の思うままに書くことが多い。

大学は何かを強制することは滅多にないので、全ては自己責任だ。同じことに対しても、見方や考え方が全然違うこと。正解というものがないこと。

### 将来の希望、母語、メッセージ

国際間の架け橋になれば一番だが、正直、就職については不安(この不安はどこから?)しかない。うまくいくことを祈る。

私は日本へ来た後、母語の中国語使用禁止と決めた。理由は日本語学習の効率を上げるためだ。母語は使わないと忘れるものだ。私は中学校の時に日本へ渡航したため、中国語の識字率や古典文化への理解度が低く、それは残念と思っている。

私は大学に入る前に中国語の使用は中国人の友達とウェチャットとの文字の交流のみだった。日常生活は一切中国語を使用することはなかった。住んでいた村は私と母を含めた中国人三人しかいない。高校三年間も外国人は私だけだった。中国語を使う場面がない。大学に入った頃、話す中国語は完璧だったが、書くことが苦手になって、文字を忘れていた。

中国の大学に留学したが、留学先を中国にしたのは、中国語のレベルは同年代の人と比べればレベルが低い、そして中国の歴史、古典文化に興味湧いたからだ。そして、今の中国はどうなっているのか、実際に長期滞在してみて、自分の目で確かめたかった。

辛いことは生きていけば不可避、その山を乗り越えられるかどうかは君次第。自分は恵まれていることを自覚してほしい、大半の人は海外で学ぶ機会はない。あなたは小さな幸せを見逃していないか。

何があっても、どんなに辛くても、諦めないでほしい。私はお出かけも、友達作りも熱心ではなかったのですが、ごく普通の生活を送っている。やれることはやった。今を満喫している。

## 多言語の中での葛藤と希望

土田 美幸

### 生まれと日本での就学歴

私は、1998年(平成10年)2月18日に日本で生まれました。小学校の1～3年の時に母の母語であるタガログ語を学ぶためにフィリピンで暮らしていました。

日本に戻った時は何一つ日本語が話せない状況でした。そのため、日本の小学校に通い出したときは取り出し授業で外部の日本語教師を呼んで週に3回程度学校の図書館や資料室で日本語の勉強をしていました。日本語ができなかった分、意思疎通はやはり難しかったが、小学校側の手厚いサポートは感じられましたし、幼稚園からの友達もたくさんいたので精神的に大変だったことはそんなになかった気がします。また、フィリピンである程度の英語力を身につけられたので教師たちとのコミュニケーションもそんなに困りませんでした。強いて言うなら、フィリピンとは全く違う生活習慣、マナーや文化等で自分が周りとは違う行動や言動をとっていたときはどうしても周りから浮いてしまい苦痛だったときはあります。また、まだ日本語を習いたての時は国語や社会の授業で何をすればいいかわからず周りがノートをとっている間私だけが顔を上げている状態だったので教室から出たいと毎回思っていました。楽しかったことは日本語が話せなかった時でも学校行事に参加できたことです。日本語教室は1年半で終わり、中学校に上がる頃には周りの生徒と同じ授業レベルまでに達しました。

### 高校進学と高校生活

中学に上がる頃には一通りの日本語能力はもうありましたので、高校も周りの生徒と同じように日本の高校を目指して受験勉強をしました。しかし、やはり国語と社会科の苦手意識は残ったままでしたので、特色選抜で得意だった英語で入試に挑み、茨城県立の高校に合格することができました。この高校を選んだ理由は英語教育に力を入れていることに惹かれたからと、水戸で人気の進学校の一つだったからです。

高校では勉強に遅れないように部活は週1日の英語文化部に入部しました。そして、良い成績を残すようになってからは、生徒会にも呼ばれ、3年間生徒会活動に没頭しました。さらに夏限定ですが、野球応援のチアリーダーも3年間行い、かなり活発に高校生活を送っていたと思います。

### 大学受験と大学進学

高校に入った当初は金銭的な問題で大学に進学するつもりはありませんでした。しかし高校の担任に後押しされ、

宇大の推薦入試とセンター試験だけでも受けることになりました。

諸事情でどうしても実家から遠くなることはできなかったので、実家からそれほど遠くなく国際系の勉強ができる学部があったので宇都宮大学に進学希望を出しました。高校での様々な活動がとても忙しかったうえ、就職も考えていたため、正直それほど受験勉強に力を入れていませんでしたが、その分、週に3回程度の放課後の担任との面接練習には力を入れていました。

集団面接が全部で5ラウンドあり、私は4ラウンド目での試験でした。かなり遅めのスタートでしたが、その分集団面接のグループメンバーたちと試験前に名前を覚え合い、仲良くなることができました。そのため、あまり緊張せずに思い通りの試験ができました。

学習面ではレポートを書くのはいまだに苦手意識を持っています。3か国のどの言語も中途半端ですが、英語で文章を書く方が楽に感じることの方が多いです。やはり、自分の日本語の語彙力にまだ自信は持てません。生活面ではアルバイトと勉強の両立が大変でした。親の仕送りがなかったため生活費や学費などは全て自分で賄っています。サークルは2年で全てやめ、ほとんど毎日働いていたので、学習にかける時間はとても少なかったのですが、単位はほとんど習得出来ました。

3年になってからは自分が関心を持っている授業しかとっていないのでどの授業も興味関心を持って受けています。特に、最近はずみでの教授やゼミメンバーとの会話を楽しんでいます。

### 将来の希望、母語、メッセージ

現在就活中なので、近い将来は日本で内定をもらい、キャリアを積みたいと思っています。日本で就活がもう少しいかなかったら海外に行くことも検討しています。

現在は日本語、フィリピン語、日常会話程度の英語を話します。日本に来る前まではタガログ語を母語としていましたが、今では日本語にしています。ただどの言語も中途半端ですので、自信を持って「〇〇話者です」と言えないのがコンプレックスに感じます。

日本はまだまだ外国人児童生徒たちへの支援が正直遅れている気がします。でも自分から行動すれば大学に通うことだってできるので決してあきらめないで欲しいです。周りに溶け込めずに大変なこともいろいろあると思いますし学校に行きたくないと思ってしまうことだってあるかもしれません。でも前向きに考えれば日本語以外の言語を話せる人は日本では限られていて将来絶対に自慢できる素

晴らしい特技になると思います。自分のバックグラウンドに自信と誇りを持ってください。応援しています。

## 自分のアイデンティティを大事に

アティラ ナシル

### 日本に来た経緯と小学校時代

私は1999年4月26日にトルコで生まれた。母親が筑波大学大学院(修士課程)への進学が決まり、最初に来日した。その2年後、父親も同じく筑波大学大学院(博士課程)への進学が決まり、父親と私は2008年来日した。そしてつくば市で、家族3人の生活が始まった。母親は来日して2年経っていたため、多少日本語が話せた。しかし決して流暢ではなかった。私と父親は、まさに日本語能力がゼロの状態だった。

私が来日してわずか3日にして、私の通う小学校(つくば市立葛城小学校)が決まった。通常、外国人児童のこれから通う小学校を探す場合、市役所に訪れて、小学校を紹介してもらうのが一般的だろう。しかし、両親はそのような手段を取らなかった。私たち家族の住むアパートの前を毎朝小学生たちが通学のため通る。彼らに勝手についていき、直接小学校へ出向き、入学を申し入れた。もちろん事前に連絡などしていない。突然外国人家族に入学を申し入れられた小学校は、明らかにパニック状態だった。しかしパニック状態ながらも、学校側は親切に面談を行って対応してくれた。その面談をもって、私の入学は決まったのだ。面談でどんな話をしていたのか、さっぱり分からなかったが、この先のことでは私は不安の気持ちでいっぱいだった。そしてその面談で泣いてしまった。先生と両親は「絶対君なら乗り越えられる」と声をかけてくれた。その言葉を信じて私は頑張ろうと思った。その言葉が今にも心に深く残っている。

小学校に入学し、私は特別な学級に入れられるわけでもなく、日本人と同じ学級で授業を受けた。もちろん何を言っているのかわからないが、とりあえず授業を受け続けた。しかし算数だけは、非常に理解できた。数字は万国共通だからだ。

日本語は徐々に覚えていった。来日して1年で日本語を流暢に話せるようになった。今思うと、早く習得できた理由は主に3つ。1つ目は、通学時に友達とおしゃべりをしまくったことだ。一日の通学時間は往復で2時間だった。通学時間中の友達とおしゃべりを通して、いろいろな日本語を覚えた。今思えば、最高の環境だった。2つ目は、学校から帰宅した後、毎日友達と遊び、その遊びを通していろいろな日本語を覚えた。毎日公園で遊んだ。サッカーしたり、野球したり、鬼ごっこしたりと。スポーツを通して多くの友達

ができた。3つ目は、私の性格が非常に元気で、社交的だったことだ。日本語が流暢でないときから、知らない人に声をかけまくり、友達を多く作っていった。この社交的な性格のおかげなのか、小学校6年生の時、クラスの学級委員長を務めることができた。

小学校、中学校で最も苦労したことは、給食だ。私はイスラム教徒であるため、豚肉は食べられない。しかし、学校給食には必ずと言っていいほど、豚肉が含まれている。私は豚肉が含まれている料理を食べずに、その他の料理のみを食べた。いつも食べる量はみんなの半分ほど。育ち盛りの時期であったため、いつもお腹がすいて仕方がなかった。

### 勉強しなかった中学時代

中学校に進学する直前、私たち家族はより広いアパートに住むために、家を引っ越した。そのせいで、小学時代の友達と同じ中学校に進学することができず、知っている人が一人もいない中学校(吾妻中学校)に進学した。少し不安はあったが、あっさり乗り越えられ、すぐに馴染めた。そして中学時代も3年間、学級委員長を務めた。

それまで、すべて順調であったが、ここで大きな不幸が起こった。両親が離婚したのだ。これが私の精神に与えたダメージは非常に大きかった。毎日が辛かった。私は父親と同居し、生活した。父親は愛情をもって私を育ててくれた。最も尊敬する人である。父親は平日毎日、朝から晩まで研究に没頭していた。朝7時から夜の23時まで研究をしていた。祝日は生活費を養うため、一日中、飲食店でアルバイトをしていた。しかし一切辛い顔を見せなかった。

親が一生懸命に研究して、働いているのに、私は勉強を完全に怠っていた。学内順位はいつも、下から5番目ほどだ。父親は私を信じて、勉強のことには一切口を出さなかった。結果、受験の日まで一切勉強をしなかった。もちろん進学した高校は偏差値が非常に低い。

### ピンチに気付いた高校時代

高校に進学をするとともに、父親は大学院を卒業し帰国した。私は日本で働いている母親と同居することになった。そのため、水戸に引っ越し、水戸の高校に通うことになった。高校受験は県立高校に落ちて、私立高校に進学した。その高校は1学年700人在籍する大きな高校であった。その700人の生徒は学力順にクラスが分けられる。上からZコースクラス、Sコースクラス、Aコースクラスだ。私は最も学力が低いAコースクラスに入った。学力の高いクラスは授業料が安く、学力の低いクラスは授業料が高かった。1



月4万2千円であった。この料金は入学した段階で決まり、卒業まで変動することはない。学費はすべて母親が負担してくれた。私が中学時代に勉強を怠ったせいで、母親を苦しめる羽目になった。高い授業料を払ってもらう母には申し訳ない気持ちでいっぱいであった。

そこから私は一生懸命に勉強を始めた。1年生の頃はAコースクラスの中でも学力順位は低かった。しかし、毎日地道に勉強を続け、2年生になってからは、学年順位では、1位を取り続けた。しかし、所詮Aコースクラスであったため、学力学年順位は1位でも、模試になると、全国の受験生と比べると、学力はまだ低かった。

3年生になり、進路を決める時期が来た。周りの生徒たちは、ほとんどが指定校推薦で私立大学の進学先を決めていく。私立大学は授業料が高いため、私はどうしても国立大学に進学しなかった。はじめは、第一希望が筑波大学国際社会学群であった。しかし学力はそこまで達しなかった。そんな私を高校は全力でサポートしてくれた。筑波大学に私を推薦してくれ、公募制推薦入試を受ける機会を得ることができた。筑波大学の公募制推薦の枠は1校ににつき、2人までと定められていて、人気であった。もちろん筑波大学の推薦枠を狙っている人は多かった。その多くが私のクラスよりも学力が高いZコースクラス、Sコースクラスの生徒であった。高校側は、日ごろの努力を評価してくれ、私を推薦してくれたのだ。また、高校で学級委員長を務めていたが、それも評価してくれた。

せっかくもらった筑波大学への推薦枠を無駄にしないように、万全の準備をして推薦入試に臨んだ。しかし、結果は不合格。推薦してくれた高校と先生方に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。そこから、筑波大学への進学をあきらめ、一般入試で進学できそうな国立大学をさがし、宇都宮大学国際学部を見つけた。受験勉強により一層力を入れ始めた。センター試験が終わると、2次試験の対策を始めた。2次試験では英語科目は自分自身で勉強した。小論文に関しては、学校のAコースの学年主任の先生の力を借りた。先生が用意してくれた小論文の問題に解答し、先生に添削をもらう。1週間に約3つの小論文を書き、2次試験まで合計で30以上の小論文を書いた。先生の添削とアドバイスのおかげで徐々に、書く能力が上達していくのを実感できた。Aコースクラスで2次試験を控えていた生徒がわずかに数名だったため、より一層厳しく、かつ熱心に指導してくれたのだ。忙しい先生が、私一人のために、貴重な時間を割いてくれたことには、感謝の気持ちでいっぱいだ。こうして、いろいろな人の支えがあり、宇都宮大学国際学部一般入試で合格できた。

### 自由な大学生活

高校まで、散々迷惑をかけた親にはこれ以上の負担を背負わせたくなかった。そこで、大学では、親に金銭的に絶対に頼らないにしようと思った。授業料を払うため奨学金を借りようとしたが、外国人のため審査が厳しい。また連帯保証人をつけなくてはならない。親に連帯保証人になってくれとは言えなかった。そんな私に宇都宮大学が手を差し伸べてくれた。授業料減免制度だ。宇都宮大学の授業料減免制度のおかげで、私は授業料が全額免除された。宇都宮大学には感謝の気持ちでいっぱいだ。また、私はアルバイトを3つ(塾、家庭教師、スーパー銭湯)掛け持ちし、生活費をすべて自分で賄うことができている。大学生ながら自立していると自負している。

そんな大学生活に関して、不安な点また不満な点は何一つない。それどころか私は今希望で満ち溢れている。私は少数民族の人権問題に興味があり、将来は少数民族の人権保護活動ができる仕事に就きたい。その一歩として、大学2年次に、ミャンマーの少数民族ロヒンギヤを取り扱ったシンポジウムで発表した。そのシンポジウムにはゲストとして外務省国際司法協力担当大使の野口元郎大使をお招きした。このシンポジウムを通して、大変有意義な経験を積むことができた。今後も、上記の研究に専念していきたいと思っている。

### 低下する母語能力

私が日本に来日したのは小学4年生の時だ。まだ母語能力が半人前の時期であった。来日して母語の使用頻度は減り、それに伴い母語能力も低下した。母語を使用するのは家族と話す時のみだからだ。そんな私を心配し、父は母語を忘れないための教育をしたのだ。それは毎日、母語で日記を書くこと。父が帰国する中学卒業の時まで、約5年間、毎日日記を綴った。そのおかげで読み書き能力は、今でも多少ある。

私は決して母語を忘れたくない。しかし、大学に入学後は、一人暮らしであるため、家族と話す時間もほとんどない。たまに電話するくらいだ。そのため、母語能力はさらに低下している。母語を少しずつ忘れていく自分が怖い。

### 外国人児童生徒へのメッセージ

これまでを振り返ってみると、「私は外国人だから…」と思ったことは一度もない。自分のアイデンティティを愛して、素直に生きてきた。日本にいる外国人児童生徒には、積極的に社会的に生きろとは言わない。自分が外国人であることを意識せずに、素直に生きてほしいと思ってい

る。

また外国人のための特別な学級には進んでほしくないと思う。少なくとも日本語能力向上の妨げになるだろう。最初は苦しいと思うが、日本人と同じクラスで過ごしたほうが必ず言語能力は向上する。言語能力が向上すれば、自信が湧き出て、人と接しようと思うはずだ。ただ、日本人と同じクラスに、ポツンと外国人児童生徒が一人いるといじめられる対象になるリスクがあることは確かだ。そのような状況が起こらないように、学校側が取り組んでいくことを期待する。

### 日本での人生経験に感謝

五十嵐 ダリア

#### 生まれと日本での就学歴(小中学校)

私は1999年1月27日、ロシアで生まれました。2008年10月に、母が日本人(現在の父)と結婚したため9歳で日本に移住することになり、日本の公立小学校4年生に3学期から編入しました。

小学校では、多くの外国人児童が経験するようないじめなどはなく、周りに支えられた覚えがあります。日本語に関しては、移住の時点ではひらがなも読めないレベルで、最初の2週間くらいは母に学校に付いていってもらい日本語を訳してもらってましたが、その後は別室で先生と露和辞典やジェスチャーを使いながら教えられて学びました。また、運良く同じ街に日本滞在歴の長いロシア人が住んでいたため、その方に日本語の家庭教師をしてもらいました。当時は、日本に移住する直前に妹が生まれ、そのお手伝いや遊びなどで精神的に忙しく、日本語の勉強を苦痛に思ったことはなかったと思います。そして編入後半年ほどで日常会話ができるレベルまで上達し、5年生からは周りと同じペースで学習を進めることになりました。難しい用語などが理解できず学習プログラムについていけない部分もありましたが、通常のペースで勉強を続け、中学を平均くらいの成績で卒業することはできました。

#### 高校進学と高校生活

高校へ進学することは、日本に移住する前から決まっていたと両親に聞いてます。父はよく、外国人は学歴が良くないと日本での就職が厳しいと言っていました。高校を選ぶにあたっては私も母も進学システムがよくわからなかったため、父が勧めた公立高校を目指しました。入試には特別枠などはなく、5科目試験の一般入試で受けました。併願で私立の学校も受けました。私は勉強への意欲がなく受験勉強にあまり取り組まなかったため、両親も中学の先

生方も受からないと思っていましたが、奇跡的に公立高校に受かることができました。神様の導きだと信じています。

高校では、ついていけない科目は特にありませんでしたが、専門用語や漢字の多い日本史は苦勞しました。友達関係においても苦勞が多かったです。文化的背景による考え方の違いなどが原因だと思いますが、日本人との親密な関係を築くのができませんでした。日本のアイドルや映画、お笑いが好きになれずロシアのものを見続けていたので、周り共通の話題がもてず輪に入れないことが多かったです。一緒にお弁当を食べる程度の仲の人はいましたが。

#### 日本の大学への進学

大学進学も移住の時点で父が決めていたので、行かないという選択肢を検討していませんでした。英語が得意で、ロシア語と日本語を自由に使えていたので、言語関係の大学に進むのが希望でした。しかし当時は日本語能力が大学を受験できるレベルには達しておらず、落ちる覚悟で受けた大学の受験に失敗して1年間浪人をする事になりました。

浪人の間は、カテキョー学院に通って足りない学力を伸ばしました。そこで私の担当をしていた先生が宇都宮大学の新しい入試を見つけてくれました。金銭的な理由で私立の大学に行くことは考えていなかったため、全国で唯一いけるのが宇都宮大学であると考えました。

小論文の課題文が想像以上に難しかったのを覚えています。予備校でも様々なテーマで小論文を書く練習をしましたが、実際入試で読んだものは漢字がすごく難しく半分くらい意味がわからなかったと思います。問題はたしか課題文にはあまり関係しておらず内容自由だったので、あらかじめ勉強をした内容で書くことができました。

宇都宮大学の外国人入試の存在を知った時点で、日本語能力試験の申し込み締切の2週間前くらいだったので急いで申し込み、試験までの間は市販の「日本語能力試験N1」の問題集で勉強をしました。

英語はロシア語との共通点が多く小学校の頃から得意でした。英検2級を取得したのは高校2年生だったと思います。勉強方法としては、中学の時から通っていた英語の家庭教師に見てもらいながら英検やTOEICの問題集で勉強を進めていました。主に語彙力と読解能力に力を入れていました。

#### 大学生活、将来の希望、メッセージ

学習面では、授業内で使われる専門用語、漢字、文章などを理解すること、それらを理解した上でレポートを書くこ

とが難しいです。先生の話すスピードについていけないことも多いです。それも見方を変えればいい日本語の練習になっていると思います。

生活面では、やはり日本人の友達ができませぬ。宇都宮付近に住むロシア人や宇大の留学生とはすぐ仲良くなって、帰国後も連絡をとっている人も多いです。最初は日本人の友人もできましたが、親密になれたとも思っていました。よく分からない理由で離れてしまいました。具体的にどんな点かは説明できませんが、わたしは日本人とは友情感覚が少し合わない気がします。学部生で友達がいないと履修登録の相談などができず、自分では理解が難しいところが多いので少し大変です。

英語力とフランス語の伸びがわかるのと、3年生では卒業研究に向けた演習で特に興味のある科目を掘り下げて研究できるので楽しいです。

一番楽しみなのは大学卒業後ロシアに帰ることです。日本に来たという人生経験にも、日本語を学ぶ機会にも感謝しています。しかし11年間住んでみて、自分には合わないことがわかりました。日本で学んだ物事を活かせる仕事をロシアで見つけるのも一つの楽しみです。

第一希望ではなく、日本で入れる唯一の公立大学だからという理由で入学した人もいますので、大学が与える知識に不満があるときもあると思いますが、神様に与えられた大切な機会として感謝すべきだと思います。どんなレベルの大学であろうと、そこから知識を引き出して自分に必要なものを得られるかどうかは自分次第だと思います。頑張らましよう。

日本文化に関してですが、自分に合わないものや好きになれないものにも素敵で素晴らしく美しいものもあることを学びました。また、どのような経験もすべて自分のためになること、活かさないことは無いことも学びました。

## 外国人学生入試はまさに私のような生徒のための入試

木村 マリアナリサ

### 生まれと日本での就学歴(ブラジル学校)

私は1999(平成11)年の4月4日にブラジルで生まれました。日本へは6歳の時に来て、学校は小学校から高校卒業までずっと1つの外国人学校に通い続けた。勉強はポルトガル語でブラジルの教材を使って授業を受けて、毎週2回は日本語を学ぶ授業もあった。日本語の先生は日本人の方が務めていて丁寧に授業をしていておかげで在学中に日本語能力試験N1を取得することもできた。

外国人学校に通ったことで私は母語も日本語も使える

が、日本の学校で勉強した外国人生徒の中には母語を忘れてしまう人が多くいて問題になっていると聞いている。私の場合、家でも学校でも十分ポルトガル語を使っていたのだが、家でしか使う時間がない子供たちは確かに母語に触れる時間が短いだろう。私の両親は「まず母語を習得してから日本語を勉強させたくて日本語の授業を行う外国人学校を選んで入学させた」と言っていたが、今考えるとそれはいい判断だったと思う。両親は仕事で休日以外はほとんど一緒に過ごせなかったのも、もし自分も日本の学校に通っていたのなら母語を十分に習得できていなかったら。子供を日本の学校に入れた親御さんの場合は休日以外でも母語で話す時間を増やす必要があると思うので親も子供も大変だと思う。

私が通った学校は各学年4~10人と少人数のクラスだったが、その分先生に勉強をしっかり見てもらっていたし、学生同士でも全員と良い関係が築けていたという点でとても良かったと思っている。苦労したことは学校までの移動で、学校側から迎えの車が出されていたが、毎日午前5時起きで準備をしてから迎えの車に乗り込み、他の生徒も迎えに行き学校に着くまで合計2時間ぐらいの移動時間だった。起きるのにとっても苦労していた記憶がある。

小学校と中学校は楽しく学生生活を送ることができたが、高校進学をした時くらいからは自分の将来について真剣に悩み始めた。高校の時も変わらず少人数の教室で授業を受けて、朝早く起きて学校の迎えを待つ毎日が続いたが、より将来の心配や不安が増えていき、とりあえず日本語能力試験とTOEICなどの資格を取得する必要性を感じた。

学校の日本語の先生にもN1に挑戦するよう勧められていて、学校で先生からもらった練習問題をこなしていった高校2年に無事取得した。量をこなすことでどんどん上達していったと思う。そして、先生は次に日本の様々な大学の情報を提供してくれた。せっかくN1を取得したということで日本で進学することも視野に入れることもどうかと言われて、初めてそのことを将来の選択肢の1つに考えられた。

TOEICは高校2年の時に自主的に受けに行った覚えがある、勉強方法はとにかく「聞く」「読む」だったので、英語の音楽やビデオを見たりコミックを読んだりしていた。元から英語を勉強するのが好きだったので楽しく勉強できて結果は700点程だった。

### 大学進学

高校2から3年にかけて、日本語の先生は時々休日を使ってよく私を含めた数人の学生を専門学校や大学のオープンキャンパスなどを見学に連れていき、また、大学

の先生方とも私たち外国人生徒のことで入試について相談をしていた。この頃にも宇都宮大学を訪れていて、私が初めて参加した大学のオープンキャンパスだった。

私は当初芸術分野が学べる場所に進学しようと思っていた。先生からも好きなものを勉強した方がいいとアドバイスももらっていたし、そうしようと思っていた。第一希望は、とある専門学校のグラフィックデザイン科だった。しかし、卒業からほぼ1年経ったところ(ブラジル人学校は17歳で卒業、私は当時18歳)、そろそろ入試に向けて勉強を始めなければいけないという時期にブラジル大使館主催の進学ガイダンスのイベントに参加した際に宇都宮大学もそこにブースを構えていて、そこで国際学部の外国人生徒入試の情報を提供してもらい、とても魅力的に感じたので受験してみようと思った。

外国人生徒入試を受けようと思った理由は2つあって、1つは国立で学費が他の大学に比べて断然安いこと、そしてもう1つは自分が持っている外国語の能力が生かせると思ったからだ。学費が他の大学のほぼ半分だったのがとても驚きだったし、「国際学部」という学部名を初めて聞いて「何を勉強しているのだろうか?」と思ってとても印象的で、学部で行われている授業の名前なども見てそれらを受けてみたいと思ったのがきっかけだった。

入試試験では小論文と面接試験を受けた。小論文では1つの国際問題に対して自分の意見や思いつく解決策を800字程度書いた。そこではあまり手応えは感じなかったが、次の面接試験は上手くできたと思っている。面接試験ではどれだけ日本語でのスムーズな受け答えができていいのか、どれだけ理解できているのかを確認されていたように思う。一番緊張していた小論文試験の後だったので、面接はリラックスして普通に受け答えができたと感じている。

### 大学生生活

試験を受けた数日後合格通知が届いた時は一安心したものの、入学した当初は一人暮らしと日本語だけの環境に慣れなくて大変な思いをした。その頃はよくストレスが原因で病気になったりホームシックになったりしていたが、1年生後期からは段々とその環境に慣れていってストレスも段々と減った。大学の授業(英語と第二外国語の授業以外)は全て日本語で行われていて、聞いて理解はできていたが初めはレポートを書くのがとても難しいと感じていた。しかし、それも何十回か書くうちに慣れていって今では大変に思うこともあまりなくなった。

大学では様々なことを学べていて、国内や国際問題に

ついてそれらをどう考えていくのか、異文化をどう理解して共に生きていくことができるかなど、今まで小学校から高校までの授業で見たことや聞いたことがないようなことについて学んでいる。それらの中には「答えがない問題」というものもあってたまにわけがわからなくなるが、どの授業でも深く考えることの大切さを感じてきた。また、自分ととても関連している外国人児童生徒について学び、今まで気づけなかった自分を取り巻く環境についてより知ることができていると思う。どの授業でも新しい発見が多くあってとても楽しく学べている。

外国人生徒入試はまさに私のように日本で外国人学校を卒業した外国人生徒のための入試だと思っている。出願に必要なものはN1とTOEIC 450点以上、学校の成績表と、十分揃えられるものだ。外国人学校に通っている・卒業した者の中にはN1を取得した者もいると思うし、日本に残っているならぜひ受験を考えてもらいたいと思っている。進学を考えた者も中にはいたのかも知れないが、入試条件が合わないという理由で大学進学を諦めた人もいるだろう。この入試はそんな私たちに大学へ入るための大きなチャンスを与えてくれるありがたい入試制度で、受験してみる価値はあると思っている。

## 日本生まれ日本育ちのブラジル人

久富 アリネリサ

### 生まれと日本での就学歴(小中高校)

出生地は日本・神奈川県。1999年8月25日生まれ、現在大学2年を終えたばかりのブラジル人。日本で生まれ、数年間ブラジルに住み、日本に戻った。母国に帰る前提で来ていたので、日本の学校に通うことは、義務教育課程12年の間一回もなかった。そのため、生活内であまり言語の壁を感じることはなかった。

苦労したことといえば、環境変化が多かったこと・教師と良い関係をあまり築けなかった時期があったことの2点である。

環境変化は、主にリーマンショックの影響で通っていた学校が次々と閉校していったことと関係する。私が日本に戻ってきた時期がちょうどリーマンショックの時期と重なったため、2008年から2010年まで(閉校せざるを得なかった)転校を4回ほど繰り返した。思い返せば、閉校に慣れすぎたせいで、ちゃんとした友人を作ろうともしなかった時期は確かにあった。小学校から中学校にかけて、一人で行くことがとても多かった。

教師との関係に関しては、転校も不況もリーマンショックにも関係している。2010年から通い始めた学校は高校卒

業まで通い続けた(中高6年間)。だが、教える側にある教師が学校に長いこと留まることはあまりなかった。短い人は2か月で仕事をやめていた。人見知りや災いし、わからないことがあっても聞くことができず、雪だるま方式で勉強の苦手な部分がどんどん増えていった。

小中高一貫の学校に通っていたので、高校進学もとてもスムーズだった。受験もなく、中学校3年生の最終試験が赤点でなければ進学するという、とてもシンプルな構図だ。母国に帰ってそこで高校3年間通うという選択もあったが、中学校卒業の時に日本の大学に進学しようという決意があったので、そのまま日本に留まった。

毎朝5時起きでスクールバスに揺られながら授業を聞きに行く日常だったが、苦だと思ったことはあまりなかった。高校卒業まで通った学校では、一日中一緒にいた友人達がいたからだと思う。転校に慣れたせいで心を開くのに時間がかかったが、開いた後はとても楽しい時間を過ごすことができた(特に修学旅行はとてもいい思い出)。

高校にあがって、偶然にも教師も安定した。1年もしないで替わっていたのに、高校は三年間同じ人達が教えてくれた。当たり前のことなのかもしれないが、その学校の生徒にとってはとても貴重で嬉しいことだった。中学校では学んだことが中途半端だったので、点数はあまりよくなかったが、高校は「ちゃんと学んでいる」という感覚があった。

具体的な生活はこういうものだった: 朝5~6時に起き、スクールバスで登校。8時15分から15時まで授業をし、特別なイベントの準備をする時は17時まで学校にいた。その後はスクールバスで帰宅していた。特別なイベントとは、日本の学校で例えると、文化祭や体育祭、卒業式などである(ブラジル方式のもの)。

### 日本の大学への進学

小さいころから大学に行くことは、既に両親から決められていた。進学自体はずっと意識していたが、日本の大学は中学校2~3年生に意識し始めた。ちょうど自分がN1を取得した時期である。当時日本語を教えていた教師に相談したところ、「このまま日本語を勉強し続けていたら、日本の大学も視野に入れてもいいと思います」という言葉で、日本の大学も意識するようになった。当時は経済関係の大学に進学を考えていた。

様々な大学の説明会やオープンキャンパスに参加していると、群馬県大泉町で行われた「ブラジル生徒向け大学進学ガイダンス」というイベントで宇都宮大学のブースを見つけた。そこで外国人生徒入試と宇都宮大学国際学部を知り、受験を決意した。

「将来何になりたいかわからなくても、大学に入ってから考えてもいい学部」と言われたのが、惹かれた一つの部分だ。国際学部特有のものやわかりつつ、他にもこういったことができる学部が増えると、学びながら多様な事を考えられる人が増えると思う。

また、国際学部のみで実施している外国人生徒入試だが、他学部でも実施ができればより多くの児童生徒に希望を与えられるのだと思う。

正直、試験の日の確かな記憶はない。大雪のため、前泊して挑んだのは覚えているが、試験の内容や面接の雰囲気は覚えていない。

一ついえるのは、小論文より面接が怖かったということ。小論文はそれまで書く機会が多かったが、面接はほぼ初めてだった。面接の作法(ドアノック、お辞儀、姿勢、話し方など)を勉強し、それでも全て上手くできていたかといえば、わからないのだ。また、日本語で初対面の教師の方々とお話するのも初めてだったので、意識しすぎていたと思う。

日本語能力試験N1取得したのは2015年、中学2年生の時。勉強方法はシンプルで、本屋に並べている対策本を解いていた。日本語の教師に苦手な部分を教えてもらい、できるだけ多くの問題を読むようにしていた。主に読解問題の対策をしていた。

英語に関しては、高校を卒業してすぐの時、学校の教科書で学んだものだけで挑んだ。宇大に入学する前、点数アップのために、英語吹替日本語字幕の映画を観劇していた(日本語読解力・英語聴解力アップのため)。

### 大学生活—学習面と生活面

環境変化で戸惑った部分が多いが、大学に入学して一番驚いたのは日本語のみで進められる授業だった。「日本語の授業」はブラジル学校でもあったが、「日本語での授業」は、思い返せば、初めてだった。

また、日本の学校の授業で扱った事柄を前提に授業が進むので、知らないことは多かった。例えば、普仏戦争のこと。ブラジル学校ではあまり扱われなかったもので、その時の授業には苦労した。授業を聞く→わからない言葉や事柄はとりあえずメモをする→帰宅してすぐそれらを調べる→授業で扱ったことを、言葉を知った上で振り返る。調べるのが多かったので、大学最初の2か月間は大変だった。

生活面は特に大きな苦労はなかった。親元を離れたのは初めてだったのだが、実家が近いこともあり、よく帰省はしていた。

上記のことを繰り返していたときはとにかく苦だったが、

授業を聞いてわからない言葉をメモしなくなった(わからない言葉が出なくなった)時からとても楽しくなった。今でもわからない言葉などは出てくるときもあるが、辞書で調べる、隣の人に聞くということで解決しているため、始めの頃よりとても楽になった。

元々新しいことは好きなので、毎日の授業はとても新鮮で楽しんでいる。特に、履修授業を決めるときの履修期間は、唐突に「この授業をとろうかな」という軽い気持ちで見に行くことがあるので、新しいことだらけでとても楽しい。

### 将来の希望、メッセージ、振り返り

明確な将来はまだない。今年で3年生になるのだが、思うことが多すぎてまだ1つに絞れていない。だが、確実なことは1つある。母国と日本、この2つをサポートする・つなげることはしたい。高校の時から変わらずある希望だが、大学に入って様々な形でこれが実現可能だということに気づいた。今はその中から自分に合うものを見極めている。

一時期、私は日本語を学ぶように言われた。勉強嫌いだったので、楽しく学ぶ方法を探したら、たまたま日本のアニメや漫画に興味を持った。だが、外国人生徒で外国学校卒業生徒としては「日本語で大学に進学するのはほぼ無理」と言われた。そこから低レベルの英語を無理やりにも上達しようとし、英語で日本の大学を目指した。結果は失敗で、自分のやってきたことは全部間違いだと思った時期もある。やることもなく、ただただ情報収集をしていた日常の中で、自分の理想に合った場所に出会い、日本語・英語のどちらも(自分のレベルなりに)活用できている。今はとても楽しい日々を送っている。

「経験は財産」。似たような言葉をかけられたことが何度かある。「自分は果たして正しいことをやっているのか」や「これを経験して何が待っているのか」「失敗した。やってきたこと全部が無駄になった」などと考えたことがある。外国人学校に通ったことを後悔したこともあるが、今はそれを誇りに思うし、大学受験中に味わった苦い思い出もあるが、おかげで英語を身につけたなどの経験がある。自分のやっていることは必ずどこかで実を結びます。ぜひ頑張ってください。(大学受験中に親と恩師に言われたお言葉。胸に残ったので、そのまま発信いたします)。

自分の経験談や学歴について発表をする機会が多いが、そのたびに思うのは「自分は相当恵まれている」ということ。挫折もあったし、失敗もしたことがあるが、そのたびに新しい道に出会ったり、誰かに支えられたりしてここまで来た。日本国内で多くの転校をしたが外国人学校から出ることはなかった。外国人学校内でも日本語を学べた。日本

で大学に行く道も開かれ、それを支え背中を押す人もたくさんいた。苦しいことよりも、日本で生活する外国人としては、今のところ、良いことが勝っている。

### 母語への向き合い方

大学1年生の後期期間から、月に1~2冊本を読むことにしている(授業などで課題として出されるもの以外で)。日本語・英語・母語で書かれたものを読み、日本語と英語は語彙力上達、母語は忘れないために読んでいます。母語を忘れるというのはほぼ都市伝説に思っていた自分だが、大学に半年間通って母語との接触が激減したことによって少しだけ「母語を忘れる感覚」を味わった気がする。それ以来、母語の本も読むことにしている。

正直、世界人口話者数で分析したら、自分の母語より必要性のある言語は多い。英語・日本語・スペイン語などの言語がこれに当てはまる。そのため、自分の母語が好きじゃなかった時期もあった。だが今は母語のおかげで様々な扉が開いている気がする。新しい言語を学ぶ時(フランス語・スペイン語など)も、似ている単語が多いものは、人より吸収が速い気がする。さらに話題性。人見知りや災いし人と接することが苦手だが、日本では少し珍しい母語で話題を作れることで、人見知りも少しずつ直している気がする。

### 多くの人の支援に感謝

王 書鴻

#### 日本での就学歴(中学校)

2001年2月15日に中国で生まれた。日本に来る前に、平仮名と片仮名しか習ったことがなく、来日すぐ日本の中学3年生に編入され、意思疎通ができないため、言語面はかなり苦労した。幸いなことに、私が通っていた中学校は外国人生徒が多く、これに対する対応が進んでいた。学校に外国人生徒に日本語を教える特別な教室があり、そして、授業時に中国語の通訳の先生も常にそばにいてとても助かった。それと同時に、市内にある国際交流センターにも通い、そこで無料で日本語や日本のことを学んでいた。日本語ができないのにも関わらず、先生や同級生から挨拶をしてもらったり、日本語を教えてもらったりした。また、英語と中国語の声掛けもあり、温もりを感じた。日本語を少しでもできるようになった時、意思疎通ができることが何よりもうれしく、これが日本語を堪能にしたいという気持ちの原動力になった。

悩んだことは、学習の体制であった。私が中国で通った学校の授業では、先生が教室に来ることが基本的であっ

た。しかし、通っていた日本の中学校は美術、音楽などの授業はほかの教室に移動することになっている。次は授業なのにみんなが教室から去っていたのを見て慌てた。そして、ノートを取ることが成績に入るといことも知らなくて平常点の加点ができなかった。例えば英語の授業で、先生が黒板に書いたことは教科書と同じだったので書かなくても大丈夫だと考えたことである。学習の体制について何もわからなくて入学後しばらくの間、慌てていた。

### 高校進学した時の状況

進路選択の時、私立と公立高等学校両方に受験(検)することにした。私立高等学校は滑り止めとして先生に勧められ、入試では国語、数学や英語の試験しか受けない。そして受験しようとする公立高等学校は外国人生徒特別選抜を行っており、数学、英語に加えて、母語で書く作文の試験を受ける。そして日本語指導の仕組みも整えているということから学校の先生、市役所や国際交流センターの方に勧められていた。その後、私はどちらも受かって、公立高等学校に進学することにした。

学習面では、日本語能力が高い外国人生徒が日本人の生徒と一緒に国語の授業を受け、その他の生徒は国語の時間に日本語を学ぶことになっている。国語だけではなく、数学、英語や世界史などの教科は日本語能力に配慮のうえ、抽出授業を行った。日本語能力とその教科の点数が日本人生徒と一緒に学ぶことができると先生が認めれば、日本人の生徒と一緒に授業を受けることになる。そして、高校一年生の時に、数学や世界史の授業に通訳の先生がいらっしゃった。また、母語が配慮され、二年生から中国語の国語の現代文や古典の授業を受けた。

ある程度日本語ができてくると、日本語の意味は分かるが中国語にできないという状況に置かれてきた。その時には表現にこだわって中国語の訳を考えながら探していた。また、母語をきちんと勉強しなければ外国語の学習も上達しないと考え、中国語の本を買って読んでいたりした。また、高等学校で受けている中国語の国語の授業で中国語そして文章への理解が深まった。そして、日本語ではこのような表現するが中国語ではこのように言わないという言葉の違いを探すことを楽しんだ。

生活面では、外国人生徒特別選抜で入学した生徒は「多文化共生オアシス部」という部活に所属する。この部活は、主に龍舞、獅子舞、そして民族ダンスを出し物にし、学校の文化祭だけではなく、お年寄りの施設や、府や市の祭りなど様々なところで発表していた。また、大阪市営地下鉄で外国人観光客に行き先案内をする外国語通訳ボランティア

の活動も学校を通じて参加していた。

### 日本の大学への進学を意識するようになった時期とその当時の進学希望

日本の大学への進学を意識するようになった時期は高校一年生の時である。当時同じく外国人生徒特別選抜で入学した三年生の先輩の受験勉強の姿を見たり、そして大学合格の情報を知ったりして日本の大学に進学することは不可能ではないと考えており、自分も大学に進学したいと思った。当時は関西学院大学、関西大学や関西外国語大学が志望だった。

高校二年生に進学先を悩んだ時、外国人生徒担当教員から宇都宮大学の外国人生徒入試を紹介していただいた。入試方法を知り、簡単ではないと考えるが挑戦してみようと考えた。宇都宮大学は国立大学であり、そして宇都宮大学の国際学部は歴史が長く、実績もあるという理由で受験することに決めた。

小論文を書くことは私にとって非常に苦手で、日本語の言い回し、文章の構造などを考えることが難しかった。しかし、私が受験するのにあたって、学校がとてもし力を入れてくれた。私は国語の先生に個人的に小論文を教わることができた。文章を書くだけではなく、異文化理解などの本が先生に勧められ、何冊も読んで文章力を上げた。また、面接の練習も先生方に頼んでたくさんし、そして大学で何をしたいかをじっくり考えていた。努力した結果、自信を持って試験を受けることができた。

私が日本語能力試験N1を取得した時期は高校2年生の後半だった。勉強方法は特別なことがなく、勉強のプランを設定し、6冊ぐらいの練習問題をやったり、わからない問題や表現があつたら先生に聞いたりして自分が納得いく勉強をしていた。

私は英検2級まで取ったが、受験に必要な英語力の英検準2級を高校2年生の後半に取得した。勉強方法は日本語能力試験と同じである。

### 大学生活

学習面:大学の学習は高校での学習と違って、先生は黒板に授業内容を書くことが少なく、ずっと話すことが多い。そして、自分の能力で予想できない専門用語がたくさん出ていたりして授業を理解するのに苦労した。また、試験では記述形式の問題が出されることが多く、日本語を自由に使えない私にとっては難関とも言える。日本語能力試験N1を取ったとはいえ、まだまだ分からない語彙や文章表現があつて勉強し続けなければならぬと実感した。

生活面:一人暮らしが始まって様々な手続きに直面する機会が多くなった。例えば市役所に行ったり家具を買いに行ったりする。書類の中に普段生活や学習に出てこない語彙がたくさんあるので理解するのに苦労する。そしてその中には、選択肢が多く、どれにするのか常に迷ってしまう。大学での学びで特に楽しめていることは自分が興味を持っていることを自由に選択して学べることだと考える。授業を選ぶとき、シラバスを通して授業で教える内容がわかるので、これは大学ならではの学びだと考える。

### 将来の希望とメッセージ

私は将来、外国人児童生徒と関わる仕事をしたい。私のように日本に来てわからないことがたくさんで不安な児童生徒の手助けになりたい。今まで学校、先生そして国際交流センターの方からの支援がなければ今の私はどこで何をしていたかわからない。私のように恵まれたことを受けていない、受けられない生徒がまだたくさんいるので、このような仕事をしたいと思うようになった。

母語としない環境で学ぶことは辛いと思いますが、どうか諦めないでください。悩み事は抱えずに、周りにいる親や先生と相談してみてください。みんなはあなたのことを見守っていますから。楽しい未来があなたを待っています!一緒に頑張りましょう!

### 国際的な高校と大学での学び

石 雯漢

#### 生まれと日本での就学歴

私は中国で生まれた。生年月日は2000年5月31日である。2015年、私は中国の中学校を卒業した後、日本へ来た。中国の入学時期は日本の時期と違っているため、日本での中学校へ編入した。日本の中学校で大体6ヶ月勉強した。

日本へ来る前に、中国で日本語を少し勉強したから、平仮名、片仮名や簡単な会話ができる日本語能力があった。しかし、勉強面と生活面で苦労したものがたくさんあった。

日本の中学校へ入った後、日本語があまり上手ではないから、授業内容が勉強面については非常に大変だった。特に国語の授業に関しては何も分からなかった。テストの点数もひどかった。数学に関しては、内容自体を中国ですでに学んだ。問題文の中でも漢字があるから、意味がなんとなく分かっていた。英語も中国でもともと勉強したから、大丈夫だった。社会の勉強は大変だった。授業全体として、私は先生の解説や講義をあまり聞き取れなかった。しかし、漢

字が分かっている私は、板書と教科書の内容がある程度が分かった。それに基づいて、勉強を進めた。しかし、自分の学力が普通の日本人生徒の学力と大きな差があると感じた。

日本の中学校での勉強に関して、一番楽しかったと思うのは授業の時間が少ないことと宿題があまりなかったということである。私が中国で通っていた中学校では午前の授業が朝6時40分から始まり、12時に終わる。午後の授業は14時半から夜7時半までだった。しかし、日本で通った中学校は8時半から午後3時半までだった。結構楽だったと感じた。しかも、宿題もほぼなかった。中国で通った中学校は宿題がたくさんあるため、毎日夜11時、12時までやるのも日常茶飯事だった。

そして、日本で通った中学校は美術、音楽の授業が非常に楽しかったと感じた。美術の授業で篆刻(てんこく)をすることや音楽の授業でギターを学ぶなどを楽しかった。

日本語をしゃべるのが上手ではなかったため、先生や同級生との交流の支障があった。彼らと交流するために、日本語と英語とジェスチャを使った。また、同級生と共通する話題が少ないため、何をしゃべればいいのか分からなかった。だから、友達作るのも大変だった。

これまで知らない事を体験した。例えば、学校の給食、ハードリング(中国はやっていなかった)、そして、友達ができ、家に帰るとき、帰り道と一緒に話をしたり、彼らのことを聞いたりすることも楽しいと感じた。

#### 高校進学と高校生活

高校進学は非常に難しいと思う。日本語がうまくできない私は、普通の高校をきつと受からないだろうと思った。だから、私は留学生を受け入れる高校を選んだ。受験科目に関して、数学と英語に専念した。

日本の高校へ進学する時、なるべく留学生を受け入れる制度がある所がいいと思った。なぜなら、私は日本語の能力が足らず、日本の文化などの諸事情がよく分からなかったからだ。留学生を受け入れる所へ行けば、日本語を学ぶ授業を受けられ、他の留学生とも交流できる。また、受験をする時、私は留学生であることが学校から少し考慮されるかもしれないと思った。入試形態は留学生入試だった。試験科目は数学、国語と母語によるエッセイであった。

私の高校では、日本人だけではなく、中国大陸、台湾、香港、韓国、タイ、ベトナム、インド、スリランカなど、世界各国から来たたくさんの留学生がいた。授業に関しては、日本語能力が低い(大体日本語能力試験N4以下)人が最初日本語の授業を受ける。日本語能力がある程度(N3<

らい)に達した後で、日本人の生徒と一緒に普通の授業を受ける。

私が通った高校は寮があった。寮に住むことを通して、他の学生と交流したり、遊んだり、勉強をしたりすることをした。そこは私に対して、日本語と日本文化を学ぶ大切な場であった。他の学生と一緒に住むことによって、友情をさらに深めた。

### 大学進学

高校一年生の時から日本の大学へ進学することを希望していた。当時の進学希望は日本の国立大学だった。私は宇都宮大学のことをインターネットで知った。その後、オープンキャンパスに参加し、現地考察をして、情報をさらに手に入れた。宇都宮大学国際学部は一学年大体100人の生徒がいる一方で、33名の教師がいる。この少人数の授業により、先生と学生の距離が近い、教育水準が高いだろうと思った。

私は高校で様々な国の人と共に勉強した。将来、国際社会に活躍したいと思っているから、国際学部を志望した。一般入試を参加するなら、日本語の壁があるため、国立大学を受からないだろうと思った。この外国人を対象とする特別試験は私に最適ではないかと思った。

小論文に関しては時間が少し足りなかった気がした。文章の構成がよくできたと思うが、内容のほうは少し不十分なところがあったのではなかったかと思う。面接は少し緊張した。しかし、質問されたものをある程度準備したため、なんとなく乗り越えた。

N1を取得した時期は高校2年の夏だった。勉強方法に関しては参考書をたくさん読んで、ノートをつくり、毎日単語と文法を積み重ねて覚えた。そして、模擬試験をひたすらやった。N1はほぼ独学だった。しかし、分からないところがあつたら、学校の先生に解説してもらった。

私は高校の時TOEICの代わりに、英検を受験した。高校1年生の時英検準2級と2級を取得し、2年の時に準1級、3年の時に1級を取った。勉強方法は日本語の勉強とほぼ同じように、参考書を読み、単語と文法を覚え、練習問題と過去問をひたすらやった。そして、普段、海外の留学生と英語で交流し、洋画を観ることで英語力を高めた。

### 大学生生活

日本語力と英語力が足りないため、大学での講義に関して十分に理解できない時がある。レポートを書くのも大変だ。一人暮らしは少し大変だった。

大学で様々な分野に関わり授業を取ることを通して、視

野を広げた。また、図書館でたくさんの本や雑誌なども置いてあるから、それを読んで、楽しかった。

### 将来の希望とメッセージ

将来は自分の知識を生かして、中国と日本のかけ橋になり、国際社会で活躍したいと思う。

現在、日本語の壁に苦しめられ、自分の才能がうまく発揮できず、よい大学に進学しにくい外国人生徒がたくさんいる。国際学部の外国人生徒入試は彼らの状況を考慮し、作られた試験である。それは外国人生徒にとって大学進学の手助けになると思う。

現在、外国人児童生徒として学んでいる人たちは、日本で勉強するのがきつと大変だろう。日本で生活するうえで一番大切なことは日本語能力だと言えるだろう。日本語ができないと、勉強面と生活面に関して大きな支障になる。だから、一番重要なことは日本語をしっかりと勉強することだろう。

最後に、日本へ来た後、母語に関して、特に意識して勉強しなかった。ただ、高校や大学で周りの中華系の友達と話すことや、母語で書かれた本を読むこと、母語のビデオを見ることをやった。そのことは、母語から日本語を勉強する時に、母語の復習に役立ったと思っている。

### 学校での経験とアイデンティティの葛藤

張 丹妮

#### 多文化共生センター東京で学ぶ

私は2000年7月22日に中国の福建省の福清市で生まれた。家の都合で急に来日が決まり、中学生1年だった私は学校を中退し、2013年の5月に来日した。

来日した最初の頃、日本語に関する知識が全くなく、日本語を勉強するために、日本語学校に入る必要があった。親は自分のために家の近くにある日本語学校に入学させたが、4月から学期が始まっていたため、すでにグループが出来ていた状態だった。それと、中国語ができる先生は一人しかいなかったため、私一人のために一から勉強を覚えてくれることは出来なかった。コミュニケーションが取れない環境で孤立し、周りの人との学力の差があることが明らかであるにも関わらず、先生の補習を受けられなかったことが原因で、私はその日本語学校から離れた。

その後、親がネットで日本語学校を検索してくれて、最終的にたどり着いたのは、東京都の荒川区にある多文化共生センター東京という、外国人児童生徒の高校進学を支援してくれる学校だった。そこには中国語ができる日本人の先生がいて、日本語の基礎すらわからなかった私に色んな先

生が補習をしてくれた。多文化共生センター東京のフリースクールに入学したのは2013年6月のことだった。

多文化共生センター東京では、2014年2月まで約9か月勉強した。自宅が千葉の柏にあって、家から駅まではバスに乗って、それから千代田線に乗って、また路線電車に乗り換えて、降りたら歩いて10分ほどで通っていた。合わせて1時間30分くらいだった。

前の学校のように周囲のみんなはグループを作っていたが、中国語が話せる生徒がたくさんいたので話の内容は聞き取れていたし、先生方が親切でよく話をかけてくださったので、退屈というほどではなかった。入学した最初は周囲の人とは学力の差があったため、先生との一对一の授業がほとんどだった。覚えも早かったため、すぐにみんながいる教室に移された。また、周りの人はほぼ年上で、みんな日本の高校入試を受けられる日本語力と学力を身につけようと必死だった。私も入学して次の年に中学校入試を受験したいと思って一生懸命だった。

#### 私立の中高一貫校へ

中学校入試の時期を迎えた。日本語が上手く話せていない外国人の編入生の私が日本の普通の公立学校に入ったらいじめとかに遭わないかと心配してくれた親は、私のために私立の学校を探してくれた。最初は家の近くにあった中高一貫の私立学校を選んで受験したが、勉強し始めてからまだ一年経っておらず、日本語力も低い状態で、当然のように不合格の結果となった。その後、茨城にある中高一貫の私立学校を再び受験して、運よく受かった。その学校には特別入試を受けて入った。国語、英語、数学の三科目の筆記試験と、校長と他の二人の先生の三対一の面接だった。編入生だったので、一人で試験していた。後から親に聞いた話だが、試験の時の数学の成績が良かったとのことだった。

4月になり、私は多文化フリースクールを卒業して、T日本大学中等教育学校という中高一貫の私立学校に、編入生として入った。私の学年ではアメリカからの帰国子女はいたが、外国ルーツを持つ人は私だけだった。人見知りでも積極的に人に喋りかけない私に同級生は親切に話しかけてくれた。友達はできていたが、自分の気持ちをどうやって正確に友達に伝えようかと、話す時すぐ言葉を選んで話した。

#### 「中国人という名札」

人間関係で苦労したのは、友達同士が喧嘩した時だった。どっちかに偏れば、どっちかに陰口言われることになる。

両方にきつく言ったら、嫌われてしまう。私の学年では私一人しか中国人いなかったから、私の成す言動は今まで他の中国人に触れていなかった人(同級生達)にとっては、「中国人だから〜」という偏見にはめられてしまう。例えば、個人的に辛い食べ物が好きだけなのに、「中国人だから辛いもの大丈夫だね」ということをよく言われる。しかし、私の生まれ育った場所は海沿いで、食べ物に関しては海鮮を使った淡泊な味付けが特徴だ。中国人だからではなく、個人的に辛い物を好きだけだが、その人たちは全ての中国人を私の基準で決めつけてしまいがちだ。なので、友達に喧嘩についても、私のかける言葉で良し悪しを判断される。実際にそういうこともあった。入学して最初の頃の話で、友達に喧嘩して、仲直りして欲しくて、拙い日本語で一生懸命にアドバイスをしたが、その後別の子から「あいつ何言ってるのわかんないわ、やっぱ中国人だから考え方が変わってる」と理解されず、悪く言われたことがあった。揶揄ってきた男子に嫌味を言っても「中国人は怒りやすいね」と言われることもあった。こんな感じで、偏見に当てはめられることが怖いのと、自分のことで偏見を作ってしまうのが怖い感情が生まれた。自分の臆病な性格と、一人だけ外国人であることの不安もあって、悪く思われ孤立されてしまうのが嫌だった。ただ一人の「中国人」という名札を背負っている私が日本人の群れでうまく過ごしていくために、偏見や文句の対象にならないように、自分の言動や空気を読むことにとても神経質になっていた。

学校では「中国人」という名札がついている私に対して、みんなは「わからないことは聞いてね」とか優しく声をかけてくれるが、そうでない人もいた。ある日、悪戯好きな男子に怒ってしまったら、「帰れ!中国人」と言われた時の心情はよく覚えている。その男子に対しての憤怒の気持ちと、怒ってしまった自分を情けないと思う気持ち、それと自分が日本に来たいわけでもないのに日本に連れてこられて、親に日本語勉強をさせられ、頑張った結果としてやっと日本人と同様に普通の学校に入って、仲間になろうと思って毎日空気を読んで、自分を「日本化」しようと頑張っているのに、なんで「帰れ」と言われなきゃいけないのか。このようなことを考えて、理不尽な気持ちが大きかった。このこともあって、私は「中国人」という名札を外したいと思った。「中国人」じゃなく、「張丹妮」として評価されたいと思った。

#### 部活とアイデンティティ

学校では先生が支えだった。自分に日本社会での生き方を教えてくれた。それは部活に入れてくれたことだった。部活という認識がなかった私に、先生は部活に入るように

勧めてきた。日本社会での先輩後輩の人間関係がわかり、人と人が関わる部活の風囲気を体験させたいと言ってくれた。そのおかげで、大学でもサークル活動に積極的に参加でき、先輩後輩の良い距離がわかるようになったと思っている。

中高一貫の学校だったので、同じメンバーで学校生活を送ってきた。良く一緒にいたので、その人たちには私から「中国人」という名札が見えにくくなり、「丹妮だからこういうことするんだね」と言われるようになって、嬉しかった。しかし、問題になってきたのは、自分のアイデンティティが良くわからなくなってきたことだった。大学受験の時に先生と面談して、「ルーツ」について聞かれたことに対して、うまく答えられなかった。その時に先生が言ってくださった言葉は「自分のルーツを忘れないで、せっかく良い経験しているのだから、もっと自分のアイデンティティについてしっかり考えて、それを大切にしろ」だった。そのことがあって、自分探しをするようになった。

#### 日本語能力試験

日本語能力試験N1を取得したのは、中三のことだった。当時は、何の試験なのかよくわからないままに、親に受けさせられた。とりあえず日本語の試験だと思って受けに行った。試験自体が何なのか分からなかったので、対策もしていなく、そのまま受けに行ったが、幸い合格した。そのあとも、いつか自分のためになると思って、中検や英検を受けて来た。中検は準一級を受験したが、思ったより難しく、翻訳の問題ばかりで対策をしっかりしていなかった。一回目は見事落ちた。二回目はしっかり対策をしたので、受かった。英検については、学校で受けさせられるので、学校で申し込んで学校で受けた。英検の対策は学校の課外授業で行った。

#### 大学進学、大学で久しぶりに中国語を使う

宇都宮大学国際学部の外国人生徒入試を知ったのは、親の紹介だった。親に受験してみないかと勧められて、自分にぴったりの入試と思って受験した。外国人生徒入試の面接や小論文についてのことだが、面接の時はすごく緊張していたので、質問された内容はすっかり忘れてしまった。小論文は難易度がちょうどよく、文の長さもちょうどだった。昨年の小論文は「話の場」についてだったが、国際学部の学生として、「話の場」がとても大事だと思っている。良い話の場をつくと、多種多様な考え方が行き交う場になることができる。

大学に入学したあと、一人暮らしが始まった。一人暮らし

では困ることは大してなく、強いて言えば自炊くらい。ところで、中学校とは違い、大学では色々な国籍を持つ人が集まっていて、大学に入って徐々に友達に向かって中国語を使ったことが印象的なことの1つだ。というのは、T日大中等教育学校では、全然中国語を使う機会がなかったからだ。中国語ができる人間がいなかったのが原因だけど、日本人の学生はアジア系の人に興味が薄いのに気づいた。学校にフランス人の短期留学生がいたが、みんなの接し方に差があった。生徒だけでなく、先生もそうだった。先生はその生徒のために教室にフランス語の本を置いたが、私にはそういうことはなかった。無意識にやっているとは思いますが、外国人たちはそれに対しては敏感だ。なので、大学に入って同級生に中国語を使うこと、それと日本人に中国語のことを聞かれることに、ちょっと不思議な感じはあった。

大学に入って、語学の勉強が面白く感じる。将来は言語を使った仕事に就きたい。国際学部の生徒は自分の意見をしっかり持っている人が多く、私を「中国人」としても、「張丹妮」としても見てくれる。人それぞれの考え方がどうなのかをしっかりと聞き入れてくれて、受け止めてくれる人がたくさんいる。それは私にとってとても快適な環境と言っても過言ではない。これからは、大学で自分のルーツやアイデンティティをしっかり受け止めて、自分探しをしながら、勉強をしていきたいと思っている。

### 十年一昔

陳 泓宇

#### 生まれと日本での就学歴

僕は中国の東北地方の遼寧という県の県庁所在地、沈陽で生まれ、そこで12年間住んだ後、中学校一年の時、日本に来た。その理由は今の私から見るとありえないけど、中国の祖父母の家で住むより、日本で働いている親と一緒に住みたいという素朴で、子供らしい願望があったからだ。日本に行くことになったのが、本当に急であって、何の準備もせず、来日した日の日付すら覚えていない。故に、日本語能力は皆無だった、仮名から勉強した。その時、運が良く、私のための日本語指導教員が週に三回、私の中学校に来て、午前の授業の時間で、学校の個別の部屋で日本語を教えてください。仮名を覚えるだけでも時間がかかった。言葉の理解することや自分から日本語を発することは尚更、来日してから時間がすごく経った所で出来るようになった。中学では、人の表情を読み取ることで日々を過ごすような生活を送ることが日常だった。教科の勉強はしたいと言う気持ちはあったが、能力的に無理だった。その中学校にいる唯一の外国人だった。僕に優しく接してくれる人もいた

が、僕をET扱いする人もいた、本当に人差し指を出されたことがあった。

2年くらい経って、日本語がある程度話せるようになり、学校生活も軌道に乗るようになったので、中学校三年の個別の部屋にいる時間は高校入試を準備するための特訓時間になった。日本語の先生と過去問を解くことが日課となった。毎日の日常が高校の過去問で充満された生活が1年間続いた結果、無事に茨城にある偏差値が55位の高校に合格できた。

平均値60点の高校に進学を決めたとき僕の平均点は50点くらいしか取れなかった。担任の先生から模試の結果を持って本当にこの高校に出願するのかと、本気度を試されるほど学力が届いていなかった。なので、合格した高校に行くよりもっと底辺な高校に行く予定だった。僕に勉強を仕向けたのが個別の部屋での日本語の先生で、先生からのアドバイスがかなり大きな割合を占めていたと思う。日本語の先生から「せっかく日本で勉強するなら、国立の大学に行くことを陳くんの努力目標にすべきではないですか」という趣旨のアドバイスを頂いた。その言葉に同意せざるをえなかった。この時から目標を明確にして、勉強する力を途切れなく持ち続けた。

#### 高校生活

高校3年間、僕の頭の中に残る記憶は、中間テストの勉強、授業の予習、期末テストの勉強など勉強するときのものばかりだった。とにかく、高校時代いっぱい勉強した。なぜなら高校受験の時から、僕の中に自分の努力を他の人に見せるために、自分を証明するために大学に進学すると言う考えが強くなったからだ。勉強以外の記憶は友達と仲良く学校生活を過ごしていたことである。中学校は、伝えたいことがあっても、うまく伝えられない、誤解されても、説明できない時代であった。その言いたいことがあっても言えない時から、自由に言葉を操りたいという願望があった。ただし、言語の習得から上達まで時間をかけないと出来ないことを実感した。逆に言うと、基本的文法知識を身につけたら、時間が経てば経つほど言葉が自然に頭に入って来る。高校から心をかけて日本語を勉強していなかった。日本語は全部友達との話しの中で伸びた。

日本語の先生の影響を受け日本の大学に進学することを決めただけで、宇都宮大学が視野に入ったのは高校一年の大学ツアーという学校行事である。宇都宮大学に向かうバスの中で、暇つぶしとして、宇都宮大学のパンフレットをパラパラと巡ってみた。地域デザイン科学部の次の国際学部に目を留まらせた。今でもはっきりと覚えている、その

ページは台湾に留学している先輩たちがジャンプしている写真が大きく飾られ、その写真の隣に、田巻先生がsmall is beautiful をスローガンにした国際学部の紹介があった。私は国際学という言葉に魅了された。何を勉強するかがよくわからなかったけど、自分の来日した経験はこの学部と合致するという気がした。帰宅後入試形式や受験科目などをいろいろ調べ宇都宮大学国際学部の推薦入試と一般入試を受験することを心の中で決めた。そして、高一の時に決めた宇大に進学するという信念は3年間変わらなかった。高校3年間の成績はそれほど悪くはなかった。推薦入試で無事に合格を決めた。未だに忘れることがなく、はっきりと当日の様子を覚えている。国際学部のホームページでしか見れない先生達が目の前に現れると緊張しない訳がない。でも、当日の様子は割愛させていただきたい、その緊張は自分で身をもって体験しないとわからないからだ。

合格発表の12月4日まで、殆ど毎日寝れなかった。同じテーブルでディスカッションした人がみんな優秀だったから、何度も何度も自分が言ったことを頭の中で回想した。

#### 大学生活

今では、入学して1年も経ち、第二外国語のスペイン語を本当に夢中に、今まで勉強した言語と比べながら、勉強している。そして、新学期にポルトガル語にも挑戦しようと思っている。勉強している内容自体よりも、その自由に勉強出来る雰囲気魅了された、私を驚き呆れさせるほど詳しくある事について教えられる先生の専門力に感動せざるを得ない。僕の今の状態は学びたいことを学び、やりたいことをやるという状態である。後期のある授業で素敵な先生と出会い、その先生のゼミに身を並べられるようにこの分野の知識も自学している。大学という最後まで根源まで明らかになるまで勉強する場所プラス色々な分野を触れることが出来る学際的な国際学部は僕に最適である。

#### メッセージ

「外国人児童生徒として学んでいる人たちへのメッセージ」として、私みたいな平凡な人が立派な言葉を残さないことを感じながらも、厚かましく以下の言葉を捧げさせていただきたい。僕は外国人生徒であるが、外国人生徒に優しく接すべきと言う人達に大きく反対している。人からの優しさは、人を否定する時の根拠づけになるからである。一番大事なものは何も変わらないという状態であると僕は信じている。しかし、他の人からの態度は誰でもコントロールできない、優しく接してくれた人に止めてくださいと言え

ない。

故に、僕が外国人生徒として学んでいる人達に伝えたイメージは、自分達しか持っていない外国人生徒という身分をどう捉えるかを慎重に考えるべきではないかという問いかけである。自分は外国人だから勉強できない、自分は外国人だからこれをやらなくていい、自分は外国人だから優しくされるべきだなど、外国人生徒というアイデンティティを言い訳にして、外国人生徒に向けられる親切を当たり前前に捉える人をよく見かける。このように外国人生徒が外国人生徒という言葉を使って何かを求めるようなことは尊敬され難いと思う。むしろ、外国人生徒であるけれど、他の日本人と何の変わりもない生活すること、又は、生活出来るという自信を持つことの方を私は尊敬する。私は人からの優しさが当たり前であると思ったことはない。当たり前でないからこそ、人から優しくされた時の感動は膨大である。

## 定時制高校からの大学進学

楊 添植

### 生まれと日本での就学歴

私は1998年10月8日の生まれで、中国の出身です。2014年の秋に、16歳の時、中国の中学校を卒業してから、日本語五十音をまだ覚えていない程度で、日本の宇都宮に来ました。日本に来て、日本語が話せなかったし、生活習慣にもなれませんでした。中国でも辛い経験はいろいろありましたが、日本に来て一番辛かったのは、友達がいないということ、外国にいて、母国と違う環境で、周りに話せる人がいない孤独感が一番酷かったです。

高校に進学したかったので、宇都宮市立の中学校に入学することを希望しました。中学校に入る前の1ヶ月、宇都宮の教育センターで、日本語の授業を受けました。教育センターでは、様々な国出身の子どもが来ていて、一緒に日本語を覚えたり、勉強します。そこで私の最初の友達ができました。

住んでいる所に近い中学校に編入しましたが、そこには日本人しかいませんでした。私の両親は、私が時間をかけて中学校で日本語を覚えながら勉強出来ることを希望しました。その結果、私は中学校2年に編入しました。

日本の中学校に入って、いろいろと中国の中学校と比べながら過ごしました。最初の時はなんでも新鮮で楽しかった。中国の中学校で保健委員をやっていたので、体力はそこそこありました。しかし中国では日本ほど体育をがっつりやらない。私は日本の中学校のマラソン、持久走、サッカーなどで体力が追いつかず、マラソン大会ではビリにならな

いように短時間で体力を増やすために頑張りました。初めてスポーツで苦労しました。

私はその中学校の最初の外国人生徒だったので、日本人の中学生は私に対して新鮮な気持ちを持ってくれたようで、いろいろ私と話そうとしてくれました。でも、自分の日本語力が足りないせいで、話してくれる人と会話できませんでした。私と話してくれる生徒はどんどん減っていった。結局友達出来なくて、私と親しくなれたのは2人しませんでした。学校の先生はいつも親切でした。先生と話す時は電子辞書を使いながら、半分英語で話していました。自分はまだまだ日本語がわからなかったので、クラスのなかには裏でたくさんの陰口叩かれたり、挑発してくる人もいました。しかし、先生は私がいじめや差別を受けないように注意してくれて、起きていたトラブルを解決してくれました。

### HANDSとの出会い

最初、日本語がわからない私にとっては、授業中に先生が話していることは半分勘で想像する感じでした。教科では国語が特に難しく、国語以外では、日本史と日本のことしか取り上げない地理などがよくわかりませんでした。そこで、両親は中学校を通して、宇都宮大学のHANDSにサポートを求めたところ、大学側は3人の中国の留学生を派遣してくれました。

日本史と地理は中国の留学生も詳しくないので、私と一緒に調べてくれました。このように、宇都宮大学から自分のいた中学校まで道が遠いのに、週に1回来てくれました。おかげで、教科の理解が深まっていきました。

そのあと、HANDSの「多言語による高校進学ガイダンス」が宇都宮大学で開かれたので参加しました。それまで、高校について知っていることはわずかでしたが、その説明会で、より多くのことを知ることができました。当日、中国のグループの学生の通訳者が4名いて、中国の参加者は私1人だけでした。そこで、4対1という形で、私にたくさん情報を教えてくれて、その中の一人とは友達にもなれました。そのあとプライベートの時間でも勉強を教えてくれるようになりました。

中学校を卒業し、高校受験する時、栃木県の「海外帰国者・外国人等のための特別措置」(A選抜とB措置)入試で、県立の国際的な高校を受けました。一回目のA選抜入試では、面接が難しく落ちてました。中学校の2人の日本人の友達は、2回目B措置の面接や教科の受験準備に向けていろいろと教えてくれたますが、2回目の高校受験も落ちてしまいました。国際コミュニケーションを目玉にした県立高校に私は入れませんでした。同じ高校を受けたフィリピ

ンの子も2回落ちました。その子は私立高校を滑り止めにしていたので、県立高校落ちて私立高校に入りました。私は必死に日本語を勉強し、周りの人にたくさんの応援や勉強の手伝いをもらったのに、みんなに期待されたのに、県立高校の受験で落ちてしまい、希望した進学の道は途絶えてしまいました。親にもう一年待って、もう一回受けてみないかといわれましたが、私は年齢のことを考えて断りました。そこで、親から定時制の高校という存在があることを知らされ関心を持ち、日本人と同じ受験でいくつの教科の試験と面接を受けたところ、栃木県立の定時制に入ることが出来ました。

### 定時制高校での学び

定時制には様々な人がいました。若い頃ころ戦争のせいで学校に行けなくて、定年になって入学したおばあちゃん、中学校の時にじめられて不登校になった生徒、日本で働く外国人の親を持ち、全日制の高校に行けなかった私のような人など、たくさんいました。

定時制は全日制が下校した後、17時から21時までの時間で勉強します。それまでの時間は自由に使えるので、多くの人は昼間バイトをしてから、夜学校に来ていたようです。同じ学年の中で、4つのクラスがありました。1つのクラスは10人に満たない人数でした。中国人の私以外に、3人の外国人(タイ人)がいました。人数も少ないし、勉強のレベルも高くないから、日本人と外国人がそれぞれの個性を活かして、お互いに文化の交流をしつつ、毎日楽しく送っていました。ただ、楽しい毎日でしたが、定時制高校の卒業生の9割は就職している現実があります。

私は高校入学当初から大学へ進学する希望を持っていましたが、定時制で勉強した知識や学力で大学を受験し合格することはとても難しく、昼間塾に行って大学センター入試を受けるか、推薦かAO入試を使って私立大学に入るかという2つの選択肢しかないと思っていました。私は後者を選びました。

両親の勧めもあり、土壌動物を研究している理科の先生の指導の下で、1年から3年生の1学期まで土壌動物に関する研究を続けました。宇都宮大学のiPUという高校生の研究プログラムにも参加しました。2018年4月には栃木県理科研究展覧会並びに発表会で「宇都宮市街地の里山林における隣接する二次林と人工林の土壌動物群集の比較」というテーマでポスター発表をしました。その後も研究を続け、日本学生科学賞(日本で最も伝統のある中学生と高校生のための科学自由研究コンテストといわれる)に応募して実績を作り、AO入試で私立大学を受験することを

計画していました。優秀賞を受賞すれば、合格できると言われていました。しかし、その後、考え方の違い等があって指導教員との関係が上手く行かなくなり、結局、日本学生科学省には応募せず、AO入試もあきらめました。

### 大学生活を大いに楽しむ

両親から国際学部の外国人生徒入試という特別入試のことを聞いたのは、AO入試での私大受験をあきらめたころです。国際系の学部なので、ぜひ入りたいと思いました。1回目のN1(2017年12月)はテストの直前で勉強を始めたこともあり、時間が足りず99点で落ちてしまいました。そのあと、リスニングと読解問題を練習して、2回目(2018年7月)に受かりました。外国人生徒入試までの約1年間でN1と英検に関する出願資格を得ました。塾では小論文と面接試験の練習をしました。

大学に入って、今までの定時制のような雰囲気じゃなくて、みんなの学力が高いので、自分も学力を上げなければいけないといつも強く感じています。国際学部は特に英語を重視していて、一人で英語を勉強する時間は昔と比べると遥かに長くなりました。一部の授業での専用用語や書き言葉には慣れていなくて、時々反応できなくなってしまふことがあります。ただ、大学では好きな授業が取れて、勉強できる時間がたくさんあるから、大学生活を大いに楽しめています。

今日本では高齢化社会が進む中で労働力不足という問題が深刻になっています。本格的に外国人労働者を受け入れるという政策が出されました。私は今まで日本で暮らしてきた経験、思いやりの気持ち、中国語と日本語の言語力を発揮して、外国人と日本人をつなげるコーディネーターのような仕事をしたいと思っています。

母語にどう向き合ってきたかについて、私の意見では、使えば使うほどうまくなるし、使わなければ忘れてしまう。自分は16歳までずっと中国語しか使っていなかったもので、日本に来て、母と中国語を使っています。使うから母語を忘れるということがない。ロシアと中国のハーフの友たちがいますが、ロシアの生まれで、5歳から10歳まで5年間中国にいた。彼女の中国語は上手だと思えますが、「最近使っていないから忘れちゃいそう」と言っています。「忘れそう、不十分にしか使えていない」と思えば、言語を使用できる環境を作って、使っていけば解決できるのではないかと思います。